
オッサンの異世界記

焼きうどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オッサンの異世界記

【Nコード】

N0990Y

【作者名】

焼きうどん

【あらすじ】

異世界に迷い込み、そこで出会ったクワガタに殺されたオッサン。次に気が付くとオッサンはそのクワガタ（幼虫）に！それからなんやかんやあって新たな人種であるムシビトに進化したオッサンは旅に出る。

これはオッサンが紡ぐ異世界の物語。

※セクハラ紛いの言動があります。

おっさん、クワガタに転生

気が付くとおっさんはクワガタになっていました。

あ、この場合のおっさんって言うのは一人称ね。つまりミーのこと。なぜこんな一人称かと言うと、十五歳離れた従妹に〇〇おじさんって呼ばれるから。や、最初は「おじさんじゃなくてお兄さんだよ」って訂正してたんだよ。でもさあ、なんか三十越えた辺りからどうでもよくなってきた、開き直すように「ああそうさおじさんだよ。なんなら一人称をおじさんにしちゃうぞ」って言ったらその従妹の父親、つまりはおっさんの叔父に「君がそんなんしたら本物のおじさんな俺はどうしたらいい？」って真剣な顔で聞かれたから「じゃあおっさんにします（笑）」みたにふざけたら「じゃあそれで決定ね」っていい笑顔で従妹が言った後に引くに引けなくなるとこまで持ってた今に至るとい感じ。

んで、話を戻すけどおっさんはこれでも元々人間だったわけよ。

じゃあなんで今はクワガタなのかつーと、よくわかんない。

でもある日ふと気付いたら森の中にいたんだ。それまで住宅街を歩いてたのにいきなりよ？

こりゃ白昼夢かと思ったけど妙にリアルな感触や匂いを感じた。だが夢だとこの時は思ってたんだ。だって、おっさんはまだDTな中坊の頃に同じような超リアル夢を見たことがあるからね。「あ、こんなにリアルな夢は久しぶりだ」って感激してたもん。ちなみにその時の夢は思春期特有の可愛らしいエロ夢だった。巨乳なロシア娘（ここが重要ポイント）を口説いてそのたわわなおっぱいを揉む。今でも覚えているあの感触は現実で触れた数人の女性の胸と比べると極上だったと言わざるを得ない。

え？ おっさんがリア充？ 現実で女性の胸を揉んだだけで何言ってるの！

言っとくけどね、ほとんど素人さんじゃないから。つーかおっぱいパブだよ。いわゆるお金の関係です。

いや、結構良心的なお値段なんだよ？

諭吉さんが財布からフライアウェイしていくお風呂に比べればなんてこともないじゃないか。

おっと、パブの話はもういいね。

んじゃクワガタになった経緯を説明しようか。

夢だと認識しながらもおっさんは森を歩いて美人なお姉ちゃんを探しました。いや、夢だからこそ探したんです。深くはツツこまないでね。オッサンという生き物は若人と違う意味で性欲が旺盛なんよ。不倫してんのは大体オッサンだからね。

ちなみにオッサンと心の中でカタカナ表記してるのが世の中に漫然と生きるおやじを表してます。

閑話休題

そして森の中を彷徨っていた時に出会ったのがでっかいクワガタ。どんだけでかいかと言うとおっさんが横になって寝た時より幅が広くて、クワガタの目線がおっさんくらいの高さまである。長さはおっさん二人が縦に寝れるくらいかな。まあ、言ってしまうばライトバン（車）くらいの大きさかな。

んで、「うおーでけえ……」っておっさんが感心していると、そいつったら顎はみを広げておっさんのことをジョッキンコしちゃった。

どこまで顎を閉じれるねんっ！　ってツツコミたくなるくらいに顎を閉じられたせいでおっさんは死んじゃった。ま、幸いなことに痛みを感じる前に死んじゃったから実感わかないけど。でも確かに死んだ。

んで、起きたらクワガタだったわけさ。

なんでって聞かれてもおっさんにもわかんない。ほら、あれじゃね

？ 死して尚、魂だけは身体に宿っていたが、クワガタがそれを喰ったせいでその子種に魂が宿りました的な？
うん、わかんないからこれでいいか。

おっと、説明不足だったけどおっさんは多分おっさんを殺してくれたクワガタの子供として生まれました。なぜ多分なのかはクワガタの区別なんかつかねーよってことでご理解いただきたい。

クワガタの子供だったら幼虫じゃねーの？

と思うかもしれないが、確かに幼虫だったよ？ 生後三日目までは

……

このクワガタ異常に成長はえーの！ しかも卵は地中に産むでもなく地面の上に産んで両親が子育てまでするんだ。おかしいけどあんまりに普通なんで受け入れちった。

そしたら生後四日目の朝、起きたら蛹になってた。

そんな時に脳内（あるかどうか不明だがこうして考えることが出来るのだからあるのだろう）で【キラースタッグビートル（幼虫）はキラースタッグビートル（蛹）に変態しました】って聞こえてきた。

誰が言ってるか知らないけど変態はないだろ？ 確かに昆虫が幼虫から成長していく段階は変態って言うのかもしれないけど、オッサンに変態は禁句だよ！ もう少しオブラートに包んで欲しいよまったく！

てゆーかキラースタッグビートルっておっさんのことだよね？ ま、長いからK S B って勝手に言っつけてけど。

そんなこんなK S B（蛹）のまま飲まず食わずで一週間過ぎました。正直これ以上はきつーいと思ってたんだけど次の日起きたら【キラースタッグビートル（蛹）はホワイトキラースタッグビートルに変態した】という脳内アナウンスが流れた。
だからもう少しオブラートに（略）

まあ、無事に成虫となったわけだが黒光りしてる父親とは違い、お

っさんは白いクワガタになった。勘違いしてはいけないのが、おっさんが特別なわけじゃなくて蛹から孵った他のクワガタ（兄弟達）も皆白いんだよ。

時間が経ったら黒くなるということもなく、成虫になったんだから出ていけとばかりに追い出されてしまった。

そして今に至るというわけ。

こうゆう時は解説役なのがいってくれと助かるのだが、両親も兄弟も「キシャーキシャー」的な発音しか出来ないから何もわからないし、クワガタのボディーランゲージもイマイチ伝わらない。ということでおっさんは途方に暮れているのです。

兄弟は皆、何処かへ行ってしまった。

おっさんは一人（匹？）寂しく森の中を歩き続ける。

うん、予想外に疲れない。

運動不足やタバコの影響でここんどこ体力ががた落ちしてたのが嘘のようだ。

つーかよく考えたらおっさんの背中には翅があるじゃないか。

よし、ならば人類の夢である舞空術でもやってみようかな。

アーイ、キャーン……フライー！

……………あれ？　どうやったら飛べるわけ？

おっさん、食べる

結論から言おう。

おっさんは飛べました。

要領的には瞬きを高速でしながら歩いてる感じだ。

しかし、地面から三十センチくらいをホバリングしてるだけである
と言っておく。

それでも飛んだことに変わりはなく、おっさん的には大満足な結果
です。

さて、飛行実験も終わったし次は何をしようか……

うん、決めた。

まずは飯だ飯。

おっさんと言うか、このクワガタの食糧は樹液というわけではなく
(しかしスウィーツ感覚で食べることがある) 肉だ。

おっさんがまだ幼虫だった頃は両親が採ってきてくれたのだが、今
は自分で調達しなければならぬ。

この体になっておっさんは好き嫌いがなくなった。

今では何食ってもうまいと感じる。

三十過ぎた頃から肉派から魚派に転職したはずなのにね。

野菜はこの体になってから食ったことはない。

だから本日は自生している野菜的なものとか果物的なのを探して食
おう。

やっぱこの年になってくると体が健康面を考慮しはじめるのか無性
に野菜が欲しくなる時があるんよ。

っ！か何より野性の獣狩るのとかおっさんにはレベル高すぎ。ロッ

プレイヤーさんみたいな動物に角生えてる奴とか黒い毛並みの狼的な動物とか、ぐるぐる唸りながら二足歩行してる熊さんとかいるんだけど……おっさんには無理。

とゆうわけでここに生えてるキノコって食えんのかな？

なんか黄色いけどおっさんの好きななめことかも黄色っぽいしイけるだろ。

お、そこそこうまい。

……………あれ？ か、身体がしび、れて……………う……………ご……………け……………

【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺状態になった】

↓数十分後↓

【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺回復力上昇のスキルを得た】

いやー参った。

ありゃ、ダメだわ。

素人がキノコに手を出しちゃいかんね。

食えるキノコによく似た毒キノコもあるってことを失念してた。毎年中毒に陥る人がそこそこいるから気をつけないければな。

と、そうこうしている内に林檎のような赤い果実を発見した。

おっさんの出身地の影響もあってか、ほとんど躊躇わずにぱくりとひと飲み。

【ホワイトキラースタッグビートルは毒状態になった】

あれ？　なんか目が霞むと言うか、苦しい……

お、おえ……

きぼぢわるい……

〽二時間後〽

【ホワイトキラースタッグビートルは毒回復力上昇のスキルを得た】
ふう、あーきつかった。おっさんがこんなに体調悪くしたのって高校の時に友人からインフルもらって寝込んだ時以来だよ。

それよりも食える物を探さねばな。

こうなったら野草を食うか。

お、これ山菜じゃね？

おっさん田舎育ちだから山菜はわかんよ。おっさんの祖母がよく採ってきてたからな。

あれ……なんだか眠く……

【キラースタッグビートルは睡眠状態になった】

〽数時間後〽

【キラースタッグビートルは睡眠回復力上昇のスキルを得た】

いやー、なんか知らんけどよく寝た。

でもなぜだろう……

眠ったのに疲労感やその他が解消されてない。

ま、いっか。食える野草なわけだし。

もう一つ……ぐう……

【ホワイトキラースタッグビートルは睡眠耐性のスキルを得た】

ん？ 痛っ！？ なんか痛っ！？

チクチクとした痛みに意識が覚醒する。

何事かと思って周りを見渡して見れば、おっさんをロップイヤーが角で突き倒していた。

なんつーか地味に痛い。

爪楊枝で肌を刺さるほどの力ではないけどつんつんやられてる感じ？

まあ、弱肉強食って奴かね？

そりゃ無防備に寝こけてる奴がいたら好機とばかりに襲いますよ。

とゆーわけでおっさんは逃げます。

戦わないのかって？

いや、おっさんに実害はないわけだし、何より兎を殺すのがめんどい。

ホバリングしたおっさんのスピード舐めんなよってことでその場から離脱したわけだが、腹減った。

あれだね。結局あんまり食べてないもん。

じゃあ何を食うかって言うと木の根っこだ。おっさん今、虫なわけだし木の根っこも食えるでしょ。

とゆーわけで早速地面を掘る。

ほどなくして根っこを発見&ゲット。

いただきますーす！

【ホワイトキラースタッグビートルは混乱状態になった】

あれ？　なんでおっさんはこんなところで根っこなんか食べてんの？

あ、やべ……炬燵の電源切ったかな？

いやいやそれを言うならガスの元栓の閉め忘れも……

あーおっばいで癒されてー……

【ホワイトキラースタッグビートルは混乱回復力上昇のスキルを得た】

はっ！？

おっさんは今何を……

とゆうーかなぜだかソープに行きたくなった。

その後、おっさんは生き物を狩ることなく自生してる植物などを食って生き抜いた。

最初はなんか変な状態になるけど何回も食べてると平気になってくるのよ。

そんなこんなおっさんがクワガタになって三ヶ月が過ぎた。

【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺完全耐性のスキルを得た】

【ホワイトキラースタッグビートルは毒完全耐性のスキルを得た】

【ホワイトキラースタッグビートルは睡眠完全耐性のスキルを得た】
【ホワイトキラースタッグビートルは混乱完全耐性のスキルを得た】

【不殺・特定の状態異常耐性・行動範囲が森のみで三ヶ月生きるの
特殊条件を満たした。ホワイトキラースタッグビートルはエメラル
ドスタッグビートルへと変態した】

【エメラルドスタッグビートルになったことで森の加護を得た。以
降森での行動に補正が付きます】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで木々の声のスキル
を得た】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで植物成長促進のス
キルを得た】

朝起きたらおっさんはキラッキラの濃い緑色になってました。

おっさん、初めて会話する

いやー驚いた。

起きたら緑のおじさん（クワガタ）になってたとか何の冗談よ。

つーかまた変態言われた。

おっさんはダンディなロマンスグレーなのに……

いや、今は緑だからロマンスグレーじゃねーや。ロマンスグリーン？
とゆーか緑になって何か変わったわけ？

あ、保護色か。

森の中でうんたらかんたら言ってたのはそうゆうこと？

それよりもまた適当に食い物探しますかね。

お、赤い果実はっけーん！

『それ、毒あるわよ』

「いや、おっさんには効きませんから」

毒完全耐性とかゆーの持ってるからね。

この三ヶ月の間に色んな毒性植物を食った結果だよ。

今では一口食べれば「あ、毒ある」ってわかるんだよね。

その他の耐性のおかげでおっさん何食っても大丈夫。

『そうなんだ』

「そうなんです」

『じゃあ、もっと毒が強力な実を作った方がいいのかな？』

「いや、あらゆる毒植物を食った毒マイスターなおっさんの意見を
言わせてもらえば、この実はそこそこのレベルの毒を持ちながらも
毒っぽい臭いがしないんだよね。その点は摂取する側としては嵌め
られた感がある」

『そっか。ならこのままでも生き物を毒殺するのは訳無いのね』
「そうそう。ま、おっさん以外はね……って誰っ？」

おっさんと今まで会話してたのは誰ですか？
しかし、周りを見回してもそこには誰もいない。

『クスクス』

なんかおっさんを笑ってるみたいな音が聞こえるがそこにはやはり誰もいない。

「……幻聴？」

寂しいおっさんの心が作り出した。エアなボイスだったのか。

おっさん的には幻聴よりもきわどい水着のおねえちゃんの幻影が見える方が良かった。

ここで全裸のおねえちゃんじゃないのは、逆にエロさが消え失せてしまうからだ。

森で水着はエロいが森で全裸ではエロさが足りない。

これが分らん奴は性欲に真っすぐな青い小僧だ。

そして「その水着って葉っぱ製ですか？」と考えた奴は誇っていいぞ。お前は立派な戦士だ。履歴書の職歴に戦士と書きなさい。

おっさん？

おっさんはただのオッサンです。それ以上でもそれ以下でもありません。

『幻聴じゃないよ。とゆーか聞こえてたことに私がビックリ』

また声が聞こえる。

どこだ……どこにいるんだ。

声が優しげなおねーさんっぽいからきつと美人に違いない。

「頼むからおっさんに姿を見せなさい」

『こっちよ』

声のした方向に目を向ければそこには先ほど食べた果実のなる木しかない。

『そう、あなたが今見てるのが私』

おっさんが見てる方向には先ほど食べた果実のなる木しかない。

「所詮は幻聴か……」

『いやいやいや！ 私だってば！ その見つめてくれてる木が私』

木が私って……

幻聴さんとはんだファンタジー思考によって作られたものみたいだな。

やれやれ仕方ない……

「これか？ これがええのんか？」

おっさんはとりあえず木を舐め回した。

さて、脳内の妖精さんよ。どう反応するんだい？

『や、やめて……まだ樹液は外に出てないの。私、まだ傷がついた経験がないから……』

なんかやたら艶っぽい感じで返してきたな。ここは良いではないかとか言いながら続けるべきか……

一度整理してみよう。

脳内でエアな相手を作り、それを木に見立てて会話し、その木を舐めるおっさん……

うん、気持ち悪いね。

絶対に友達になれないし、友達もない（変態仲間はあるかも）

「おっさんは馬鹿だっ！」

『え、そんなことないよ。気持ち良かったし』

「植物を満足させて何が楽しいんだっ！」

『なんか……ごめんね？』

「いや、君は悪くない。悪いのは全部おっさんだ」

『元気を出して』

「慰めるなよ馬鹿野郎。優しくされるとおっさん付け上がっちゃうからね」

『あのーちよつといいっすか？』

『あ、はい。何ですか？』

『こっちちよつと光合成に集中してるんで、もう少し静かにしてもらっていいっすか？』

『ご、ごめんなさい』

『いやいや、君はまだ若いから仕方ないっすよ。おーい、誰が一番酸素作れるかの競争再開しよっす』

『うーい』

『おけ』

『任せんしゃい』

「なんか脳内音声が増えた……」

しかも酸素を作る競争とかしてるし。

正直ありがとう。あなたたちのおかげでおっさんらは生きていきます。

そしてごめんなさい。おっさんは二酸化炭素を吐き出すためのダメ生物です。

『なんかますますへこんでるね。大丈夫、ちょっと注意されただけで杉690452さんも怒ってないから』

なんかまた慰められた。

とゆーかおっさんに対して「お母さんもう怒ってないから大丈夫だよ」って近所のお姉さんが言う感じなのはいかなものか。ま、そういうの大好物ですけど。

「さすが脳内音声。おっさんの好みを熟知してやがる」

『さっきから脳内音声って言ってるけど違うよ?』

「はいはい。わかってるわかってる」

嘘ついた子供に「お前嘘ついたろ?」って言っても「嘘なんかついてないよ」って返してくるようなもんだな。

おっさんの脳内は生まれ変わったせいか思考が若々しいらしい。

『いや、私と会話できるってことはあなたそうゆうスキル手に入れたでしょ? 心当たりある?』

む? 何やら必死だな。

「はいはい。例えば何があるのかな?」

『えっと、木々の声ってゆーのが代表的なものだけど……』

木々の声ね。うん、確かそんな感じの起きたら手に入れてたかもね……って

「え、うそ、やだ、まじ？」

『あ、やっぱり？』

こいつぁおでれーた。

木の言うことが本当ならまじでおっさんは木と会話してたわけ？
なら、あの変態行為も……

「色々すまんかった。許してちょんまげ」

『……うん、許すよ。あと、くそ寒い』

なにはともあれおっさんは初めて誰かと会話が出来ました。

おっさん、大樹と話す

おっさんは今、森の奥へと向かっている。

厳密には奥とかそうゆうのはおっさんにはわかんないけどドゴリン247526（毒の果実の木）が言うにはおっさんが向かう方向は森の奥らしい。

そしておっさんがなぜ森の奥に行くかと言うと、森の奥には森の木々の中でも長老的な存在がいるらしいからだ。

なんか「樹齢一万年を軽く越えるから物知りだよ」とのことで、年功序列なおっさんのにも話を聞くのは悪くないと思ったからだ。

道中で道に迷いそうだったらそこらにある木に聞けばいい。とゆーか木達はおっさんに結構フレンドリーだ。

曰く、「木仲間以外で話をするなんて滅多にない」とのこと。

全くないと言う奴は全体の三割ほどらしく、時たまおっさんみたいな木々の声のスキルを持つ者と会話したことある奴もいるわけだが、そいつらの話を聞くと、どうやら人間やエルフという耳が長い人間、獣人という獣臭い人間がいるらしい。いや、エルフとか獣人は人間に数えんのか？ と突っ込んだが、どうやら木達にとっては二足歩行、ある程度の知性の二つがあれば人間としてカテゴライズしてるらしい。おっさんがわかりやすく解説すると乳牛も肉牛ももれなく牛ということだ。えっ？ 違う？

それにしてもこの木々の声というスキルは便利だ。

どこに他の生き物がいるのか教えてもらえるし、何よりどの草が食えるとか自分の実は美味いとかを知らせてくれるのが何よりありがたい。

これで食料を確保するのは楽というものだ。

そんなこんな進んでいくと開けた場所に出た。
そこには陽光を反射し、キラキラと輝く湖があり、その湖の中央にある小高い丘に大樹が聳えていた。

「綺麗だな……」

どこか神聖な空気が漂うその光景に無意識に言葉が漏れる。

おそらく長老的な木というのはあの丘の大樹に間違いないだろう。

おっさんは翅を広げてその大樹の元へと向かった。

エメラルドスタッグビートルに変態（相変わらずこの表現は不服だ）
して一メートルほどの高さまで飛べるようになったのは果たして喜ぶべきことなのだろうか。

「こんにちは」

大樹の元に降り立ったおっさんは第一印象が大事とばかりに挨拶をする。

いや、まじで第一印象は大事よ？

対人関係なんて第一印象で物事が進むからね。ただし、第一印象が悪いとそこから挽回するのは大変だけど、第一印象が良いところから悪くなる場合は前者よりもかなり早いことも付け加えておく。

『ほむ、こんにちは』

おっさんの挨拶に大樹が返す。

『話は根っこワークで聞いとるよ。して、何をわしに聞きたいのかね？』

ちよいと待ちなさい。

根っこワークって何やねん。ここはツッコむべきか？

いやいや、初対面の相手、しかもかなりの年上にいきなりツッコむとかどうなのよ。

でも、上司が「今の若者はわからなくても人に聞くということがない」ってちよいぐれで愚痴ったりすることから考えれば、ツッコミはしなくともわからないなら聞くべきか。

そもそも大樹も聞きたいことがあるなら聞けよ的なスタンスみたいだしな。

「まず、第一に根っこワークってネーミングは誰が付けたんですか？」

知りたいのはこれだ。

根っこワークの説明？　んなもんネットワークにかかったもんだろ。それを根っこで行うから根っこワークだ。予想でしかないけど多分合ってるはず。

『ほむ、難しいことを聞くのう。根っこワークは根っこワーク。昔からそう呼んどった。特に意味はない』

「簡潔な説明ありがとうございます。お蔭様でよくわかりましたよ」

大樹に対して礼を言う。なんか嫌味に聞こえるかもしれないな。でも納得はしてるんだよ？　意味のない名称なんてあるところにはあるわけだし。これもその一つなのだろう。

さて、次の質問に行こうか。

「それで次に聞きたいことなんですが、ここって何処なんですか？」

ある意味これが一番聞きたいことだ。

他の木々に聞いても同じことが返ってくるだけなのだが、もしかしたらこの大樹なら――

『ほむ、なんじゃ、自分が暮らしてる場所もわからんのか？　ここはミズドリウムの森じゃ』

しかしこの大樹もまた他の木々と同じ言葉を返す。

確かに”ここ”という場所を表す言葉ではあるがおっさんが聞いたのはそうゆうことじゃないんだよね。

「聞きたいのは森の名称じゃなくて、ここが何処の国に属しているとかなんですけど、ご存知ありませんか？」

当然、この質問も他の木々で試している。しかし、返ってくるのは「わからない」ばかりだった。

『ほむ、確かプリオニ公国じゃったかの……五千年くらい前の話じゃが』

知っていた。

大樹は自分が生えてる国を知っていた。ただし、五千年前ではあるが。

五千年つつたら縄文時代とか弥生時代とかまで遡るよな？　もしかして類人猿？　おっさん、歴史は苦手だからわかんない。でもそんなに古い昔の話。

さて、プリオニとか言うやたら可愛らしい国におっさんは心当たりがない。しかし、もしかしたら過去にあった可能性も否定できない。だが、見たこともない生き物やエルフや獣人ってことから、ここは

ファンタジー世界だという可能性がおっさんの中では一番大きい。
まずはこの辺を確かめるか。

「地球とか日本、アメリカ、中華人民共和国、アフリカ、ソビエト連邦、オーストラリア、ユナイテッドキングダム・オブ・グレートブリテン・アンド・ノーザン・アイルランド。この中で一つでも聞いたことのあるものはありますか？」

『ほむ……残念ながらわしの記憶にはないのう』

「根っこワーク使ってもですか？」

『ほむ、ちよっと待っておれ……なんじゃったかのう？』

もう一度、今度は一つ一つ聞いてみる。

十分ほどの沈黙が流れ、おっさんの目が空の雲の動きを追っていると不意に大樹に声をかけられた。

『ほむ、残念ながらわしの根っこワーク圏内にはわかるものはおらんようじゃ』

ほむ、誰も知らないか。あつ、移った……おっさん、ドントマインド。

まあ、大樹には悪いがあまり期待してなかったけどね。

これでおっさんのファンタジー世界じゃね？　って想いがちよっと大きくなった。ちなみにおっさんの中では最初からファンタジー世界ではば確定している。

けどどっかの誰かが言っていた何事にも絶対はないの言葉を尊重してそうだったらいいなとばかりに地球のどこかだという余地を僅かに残しているに過ぎない。

「わざわざすいませんでした。そういえばなんですけど、おっさ……私は元々人間だったんですけど、ある日大きな黒いクワガタ……

ブラックキラースタッグビートルでしようか……に殺されて気付いたらその幼生体になってたんですけど、その現象に関して何かわかりませんか？」

わざわざ黒とかブラックってクワガタの前に付けるおっさんはいじらしい存在ではなからうか。

『ほむ、それは興味深い。この森の主的存在であるブラックキラースタッグビートルに殺された人間というのはわしもいくつか心当たりがある』

ほう、詳しく聞きたいものだ。

そして主的存在ということはつまりブラックキラースタッグビートルはおっさん（クワガタ）の父親クワガタしかいないらしい。

さて、本邦初公開。おっさんの母親の色は灰色である。実際森の中でたまに見かけた両親以外のキラースタッグビートルには実に灰色が多い。

『ただ、森に入って運悪く奴に会ったがために殺された人という存在はそこそこいるでな。特定は出来ん』

「あ、えっと見た目は四十手前くらいのオッサンなんですけど……」
『すまぬが特徴を言われてもむしろにはようわからん。それがエルフや獣人、人間などの種族じゃたらわかるんじゃが個人の特徴は雄か雌かくらいしか……の』

「いえ……」

まあ、それは仕方ないこともな。

何せおっさんだって木を見て個別に判別するのは無理だ。

それが桜か銀杏かはわかってても桜の木の内のあるこれは傷があるなどの特徴がないと厳しいものがある。そもそも意識して見なければ

それはただの桜としてしか見ない。

……ん？ よく考えたらおっさんにはやたら目立つはずの特徴があったじゃないか。

「あ、あの！ ある日突然森の中に現れた人間。そういう人物に心当たりは？」

おっさんは気付いたら森の中にいた。

それならば不自然な人物として目立ったはずだ。きっと注目を集めたはず。

『根っこワークで聞いてみよう……ほむ、確かにいたみたいじゃない？』
「マジですか!？」

いかん。興奮して敬語じゃなくなってしまった。落ちつけ落ちつけ！。

「本当ですか？」

『ほむ、だいたい六百日くらい前にそのような人物がいたそうじゃろっ……』

予想以上に前だったために驚きに言葉が詰まってしまう。

『ほむ、すまなんだが目撃したものもよく覚えておらんらしい。何せ紅葉の前じゃったみたいだし、いきなり現れたと思ったらふらふと歩き出して殺されてしまったらしくてのう』

「そうですか……」

夢だと思って歩き回った結果、でかいクワガタに出会って死んだわ

けか。

他人（他木？）から見たということを聞いて考えてみるとなんともマヌケなことだ。

まあいい。切り替えよう。

なぜならおっさんは最近加齢臭がきつくなってきた身体から入浴剤の森の香り（エメラルドスタッグビートルになってからふと嗅いでみました）みたいな匂いのクワガタになったのだから

第二の人生、この身体で楽しんで生きていこうじゃないか。

おっさん、大樹と話す（後書き）

ヒロインを出せる気配がない……

あと数話は出てきません。とゆーかクワガタと木だけであと一〜三話やる予定です。

ここだけ聞くと昆虫の観察日記みたいですな。

プロットらしきもので流れはラストまで大体決まっていて、あとは思いつくままに肉付けって感じで書いてます。

早くヒロイン登場まで書きちゃいたいけどペースが上がらない……

ああ……早くオッサンに真っ当なセクハラさせてえよ……

愚痴ってすいません。

読んでくれてありがとうございます。

出来ればこれからも拙作にお付き合いくだされば嬉しいです。

続おっさん、大樹と話す

『さて、わしからおぬしに尋ねたいことがある』

唐突というわけでもないが、大樹がなにやら物々しげに声をかけてくる。

こうゆう時って物語だと得てして厄介事に巻き込まれたりするんだよな。おっさんそうゆうのノーサンキューなわけよ。

「黙秘権を使用します」

どうだ！ きっぱりと断ってやったぜ。

おっさんはノーと言える日本人。上司が帰りに呑みに行こうと言っても奢り以外では行きません。奢りなら限りなく百パーくらいで参加するけどね。

ちなみにおっさんは25歳以上の女性（発育は平均以上）でないと興味がないので「新入社員の若い女の子達も来るんだよ」と言う誘い文句に踊らされない。ただし、「中川さん（36歳・既婚）も来るみたい」にはほとほと弱い。中川さん、美人で胸がでかいからね。おっさんの好みどストライクなのさ。人妻？ おっさん的にはその響きは世界一のバイオリニストの演奏並におっさんの心を奮わせます。

ただ、肩にポンと手を触れただけで「セクハラですよ」と言われるのはいかなものか……

その癖、他の社員の男（美形）に同じことされても「なに、偉そうにしてんのよ」とかまんざらでもない顔で言うんだよね。

不快感を感じたらそれすなわちセクハラ。日本政府よ……ちゃんと境界線を決めてくれ。あつ、今居るのはたぶん日本じゃねーからおっさんには関係ねーか。

『して、何を尋ねたいかと言うとじゃな』

ん？ あれ？ おっさん黙秘権使ったよね？
なんで話が進んでんの？

『人という種についてじゃ』

「はあ」

言っちゃったよ……

こっちが黙秘権使ってるのに聞いてきやがったよ。
これ、もう聞くしかなくない？

「どうゆう事ですか？」

『ほむ、人という種になりたくはないかということじゃ』

よくわからん。

でも、なりたいかと聞かれればなりたいわけだが……

「なれるんですか？」

『可能性の話じゃが……わしが見たところ、おぬしには人という種になれる可能性が高い』

「どこら辺がですかね？」

『その前に人という種がどうやって誕生したか知っ取るかの？』

人がどうやって誕生したか。

これは歴史が苦手なおっさんでもわかる。

猿から類人猿。そして類人猿から人へと進化していくことで人が誕生したはずだ。いわゆる進化論だな。

まあ、アメリカなんかじゃ神様が全て造ったと言う創造論を信じて

る奴がかなりいるらしいが、おっさんは断然進化論を信じてる。

「えーと、神様が造った。または別の生き物から進化した。この二つが考えられますが、私は後者だと思います」

『そう、それが正解じゃ』

正解って言われた。クイズだったの？

『人という種は進化によって元よりも優れた力を得た。まずはじめに妖精の中から進化した最初の人という種が現れ、自らをエルフと名乗った。次いでエルフが作り出した無機物に命を吹き込んだ物、つまりはゴーレムから人に進化した者が現れ、ドワーフと名乗った。次に四足の獣の中から進化した者が生まれ獣人と名乗り、その次は水の中で生きる者から進化した者は魚人と、最後に二足で歩行する猿は人間と名乗ったのじゃ』

「そうですか」

だからなんだよって話。

つーか人間はやっぱり猿から進化したのな。獣から進化した点では獣人とやらと同じだが、きつと獣耳がないのだろう。あとは、見たことないからわかんね。

『その進化した条件はなんじゃと思う？』

「さあ？ わかりません」

『少しは考えて欲しいんじゃないかな。まあ、よい。人に進化したものにはある共通点があったのじゃ。それは……知恵と魔力。そしてその魔力を扱う技術じゃ』

「なるほど」

わかったようなわからないような……

で、それがなんでおっさんが人になりたいかどうかの話に繋がる？

『わしはおぬしを見て、言葉を交わした。その結果、おぬしは人と同じような知恵を持っているとわかった。いや、おぬしの言葉を信じるならば人であった存在がスタッグビートル種へと知恵をそのままに生まれたことになる』

「……要約すると？」

『わしは長年生きてきた。そのうえで、初めて人へと進化できる可能性を持つ虫を見つけたのじゃ。じゃからおぬしが人に進化したいと言うのならば、手を貸そうと思つての』

「なんでそんな一文の特にもならないことを？」

ぶっちゃけ裏があるだろと勘繰ってしまふ。

おっさん、これでもドロドロした大人の世界にいたからね。

こうまで親切にされることに抵抗感があります。

『ほむ……いいじやろう、話してやろう。まず、最初にエルフに進化した者はタファンの森という場所に現れた。ドワーフもタファンの森が最初じゃ。次に獣人はバコタの森で生まれたのじゃ。魚人はどっかの海。人間はテロンの森の猿が進化した種なのじゃ』

どこで進化したとかどうでもよくね？

『で、根っこワークで一年に一度超長距離根っこワーク会議があつての』

もはや根っこワークはどうでもいいんですけど。

『あいつら何年経ってもそのことを自慢げに話して悔しいんじゃ！』

……は？

『じゃからおぬしを進化させて、新たな人の種に立ち会うことで自慢したいんじゃない。じゃから、な？ 一緒に頑張ろ？』

こいつ、他の木に自慢してーだけかよ。

「やってやってもいいけど、世の中はギブアンドテイク。おっさんが進化することであんたは他の木に自慢出来る。だけどおっさんにあんたは何をくれるわけ？」

おっさんの中で大樹のランクが下がったことで発言がかなりおざなりになった。

ちなみに人に進化出来るならそれだけでおっさんには利益がある。しかし、相手にお前が言うから仕方なく進化してやるんだぜってスタンスになることによって恩着せがましく、もっと色々な物を引き出そうとこ狡い活動中です。

『ほむ、それは進化できてから決めようではないか』

……腐っても（物理的には腐ってないけど）一万年以上を生きる大樹か。

ここです承すれば、進化出来たとしても「ほむ、進化できたんならそれで十分じゃないかのう」とかい出す畏れがある。なんとしても言質はとっとかねーと。

「なんか役立つもんくれ」

『とは言っても、所詮わし木じゃし』

「一万年生きてるならなんかあるだろ」

『ほむ……そうじゃな。ならばわしの力を与えよう』

「与える？ どうやって？」

『わしの力を濃縮して実を付けるんじゃないよ』

おっさんには大樹が不敵に笑ったような気がした。

続おっさん、大樹と話す（後書き）

まず初めに、この物語はファンタジーです。

猿から人に進化するには何十年、何千年、何万年かかったとか言うツツコミは聞きません。

なぜならファンタジーだからです！

大切なので二度言いました。

納得できない部分はこれでどうか誤魔化してください。

なお、ファンタジーでも説明出来ないような疑問があれば質問はあります。答えるかどうかは別ですが……

ただ、出来る限りは答えたいと思います。

作中に出てきた中川さんですが、私の書き方のせいで感じ悪い人に見えるかもしれないですけど、実は悪いのは全部オッサンだったりします。一人称なのでそこらは書けません、悪いのはオッサン。これだけはわかって欲しい。

ちなみに裏設定では中川さんはオッサンと同期入社。

機会があればそこらも書こうかな……

おっさん、修業する

その後、大樹によってプロデュースされたおっさん進化計画が実行に移された。

人になるために必要な物は、知恵・魔力・魔力を扱う技術の三つ。その内、おっさんは知恵の面はクリアーしている。

しかし、魔力に関してはさっぱりなのでそこを一から習得していくことになった。

以下はおっさんの魔力を感じられるようになるための修業のメモリアルです。

『まずは体の内に眠る魔力の波動を感じるんじや』

「……具体的な説明を求めます」

『カーッとやって、グーっとする感じじや』

「カー……？　グー……？　擬音って本人以外にあんまり伝わんねーよ。おっさん感覚派じゃなくてわりと論理派などこあるし」

『ほむ、そうじゃのう……己の中にあるドロドロしたものを吐き出すかんじかの？』

「わかった。部長のハゲーツ！　ヅラの癖に偉そうにしてんじやねーよ！」

『言葉の意味はよくわからんが多分違うぞ？』

「あんたの言った通りにやったんだけど？」

『違う。魔力はもっと熱いもんじや。こう……人で言う情熱的なパトスって奴なんじや！』

「それならおっさん得意だわ。すう……イメクラで赤ちゃんプレイとか女教師プレイがしてー！！」

『それも違う』

などという、客観的に見ればなにやってんのこいつらの押し問答を三日ほど繰り返した結果、

おっさんは

魔力を

感じられなかった。

つーか当然だよ。

おっさん今まで魔力とか言うのと無縁だったし、なにより教師役の大樹がクソの役にも立たない無能だ。

おっさんは悪くありません。

『ほむ、おぬし才能ないのう』

ぐおっ、面と向かって言われるとは……

はいはい、正直「魔力を感じるくらいなら一日で出来るようになるじゃろ」とか言われていい気になってましたよ。

薄々、おっさんには才能ないなって思っていました。

しかし、あれだな。へこむわ。俯くほどじゃねーけど、暗い気持ちにさせられる。

『落ち込むでない。内的魔力はダメじゃったが、まだ外的魔力があるわい』

大樹の言葉によっておっさんの暗かった視界に一筋の光が差し込むような幻が見えた。

「その話を詳しく」

『今までの修業は己のうちにある魔力、つまりは内的魔力を感じるためのものじゃった。しかし、他者から放出される外的魔力を吸収し、己の物とする。利点は魔力の波動がわかりやすく、扱いやすい事じゃ』

だったらなんでもっと早く教えてくれないのかと思うが、教えなかった理由ってのもあるのだろう。

利点があるってことは欠点もあるだろうし。

「よし、教えてくれ」

だがおっさんに迷いはない。

なぜなら早く人になりたいからだ。

いやー、声に出してからイメクラ行きたくてたまんねーのよ。もうおっさんの体内時間で四ヶ月は行ってねーもん。

でも、クワガタとお医者さんごっこがしたい女性がいるだろうか？

クワガタなおっさんを鞭でシバき倒しながら罵倒してくれる女王様がいらっしやるだろうか？

もしかしたら世界のどこかにいるのかもしれない。だけど探すのはめんどくさい。

だからおっさんは人にならなければならない。

『ほむ、覚悟を決めた良い目じゃ。しかし、難しいぞい？』

「望むところだ」

きっと大樹には今のおっさんの姿がイケメンに見えてるに違いない。

気持ち真面目な顔してっし。

『外的魔力を扱う上で、まずは魔力の色について説明しようかの』

そう言って大樹が説明してくれたことをおっさんなりにまとめてみると

魔力には五色の色がある。

それは赤・青・黄・緑・無色の五つ。

赤は火を司り

青は水を司り

黄は地を司り

緑は風を司る

無色はそのいずれにも属さないものであるが、何物にも染まっていないために応用性の高い代物である。しかし、その力は他の四色に比べれば圧倒的に小さい。

あとは赤は青に弱く、青は黄に弱く、黄は緑に弱く、緑は赤に弱いというジャンケンのような相性もあると教えられたが、そいつは今あまり関係ない話なのでどうでもいい。

外的魔力を扱う上で最も大事なのが無色の魔力だ。

これは太陽から降り注いでいるらしい。ちなみに月からも魔力が降り注いでいて、こちらはかなり純度が高いそうだが太陽と比べると千分の一くらいの量らしい。

つまり、おっさんが外的魔力を扱うためには――

『イメージじゃ。己の葉緑体に光を取り込むかのように魔力を取り込むイメージじゃ』

無茶を言いなさる。

おっさんはひなたぼっこはしても光合成はしたことありません。

『こう……太陽よ、わしに力を分けてくれなスタンスで挑むのじゃ』

どこの野菜人だよ。

いや、あれはダジャレ好きの人が元祖の技だったっけ？

「太陽よ、おっさんに力を分けてくれ」

とりあえずやってみた。

物は試しって昔の人も言ってたしね。

……しかし何も起こらない。

「うおおお！ 猛ろ！ おっさんの葉緑体！」

当然、何も起こらない。

「太陽様、なにとぞこの矮小なるおっさんに力を分け与えてください」

下手に出してみた。

だが、何も起こらない。

「いいぜ。いつまでも付き合ってやる」

こりゃ長期戦だなおっさんは覚悟を決めました。



あれから半年ほどの時間が経った。

その間のおっさんの視線はほとんど空にあった。

晴れの日には太陽を睨み、曇りの日は邪魔だとばかりに雲を睨みつけ、雨の日は天然のシャワーを楽しんだ。

いや、全然冷たく感じねーの。しかもおっさん、洗車して撥水コートしたての車のごとく水と汚れを弾きまくり。湖に浸かるのもいいけど、シャワーは痛快だ。毛穴までしっかりクル。大粒の雨の打撃が心地いいです。

閑話休題

この半年間、何度となく外的魔力の吸収を諦めようかと嘆いた。

その度に明日とともに現れる太陽さんが「小僧、貴様はやはりそれっぽっちの存在か」とやたら渋い声で話しかけてくる（完全なる幻聴、妄想の類）

そんなところがおっさんの負けん気をくすぐる。

いつしかおっさんは日の出から太陽さんを出迎え、お願いしますの
声と共に日の光を浴びながら魔力を吸収するイメージを持ち続け、
日の入りでありがとうございますと言いながら太陽さんを送り出す
ようになった。

まあ、結局何が言いたいのかというと努力は人を裏切らないってこ

とだね。

【エメラルドスタッグビートルは無色の魔力吸収のスキルを得た】

これだよ。ある日ピーンと久しぶりのこの声だよ。

もうおっさんしばらくは太陽見なくていいーや。

何をお願いしますだよ。そして何がありますだよ。所詮、おっさんと太陽の関係は勝手に魔力を排出してる側とそれを有効利用させてもらってる側ってだけではない。

太陽が地上の一生物でしかないおっさんをピンポイントで見てるわけもねーわけだし。

なにより、おっさんはオッサンであってまだジイさんじゃないわけよ。早寝早起きは柄じゃねーわ。
んじゃ、寝よつと。

『よし、弟子よ。修業を次の段階に進めるぞい』

最近、すっかり師匠気取りな大樹が話しかけてくる。
スキルを得たことでテンション上がって報告したのは失敗だった。

「いや、おっさんは寝る」

もぞもぞと巣に入る。

築一万年強の木造。たまに話しかけてくるけど住み心地は悪くない。
そんな物件。

「大樹。休息のために十日ばかり時間をくれ」

そんなことを言いながらおっさんは意識を睡眠モードへと移した。

まどろみの中に聞こえた『いや、明日から始めるぞい』という声は
寝てて聞こえなかったということにしよう……

おっさん、修業する（後書き）

要約するとオッサンが変なこと考えながら半年間ひなたぼっこに熱中した話でした。

次話で進化かな……

ある意味オッサンの進化までが序章です。

おっさん、進化の条件満たす

修業したがりの大樹をはぐらかし続けて三日。

大樹がうるさいために予定より短い期間となったが、鋭気を養うことは出来たため、おっさんはいよいよ魔力を扱う技術を修業する。

と、その前におっさんも半年間ずっと空ばかり眺めていたわけじゃない。日の入りから日の出までは約十二時間くらいあるので、その間に大樹に色々聞いたのだ。

その中から二つ説明せねばならないものがある。

一つはスキルというものについてだ。

とは言っても詳しいことはよくわからないらしい。

だがしかし、スキルを得るには修練や経験がものをいうらしいということはわかっている。そしてスキルを得た瞬間にいつでもそれに即した行動をとることが出来る。

例えば、必死で剣を振りつづければ剣術基礎スキルを得る。これは修練により得たスキルであり、今まで野菜くらいしか切れなかったのに直径十センチくらいの木なら断ち切ることが出来るようになるらしい。更に色々な修練をつめば剣術スキルになり、剣豪スキルに変わり、剣鬼、剣聖と変化していくみたいだ。また、その過程で剣技という必殺技を得ることもあるのだが、これもスキルとしてカウントされる。

あとはおっさんが持つてる毒とかの完全耐性。こいつは修練の面がないとは言えないが、基本的には経験から会得するスキルだ。やたら毒を食った結果、体の中で「これ毒あるじゃん。分解しようぜ」ってな具合にやってくれてるみたいだ。

習得するスキルの種類は常時発動型と意識発動型、そして種族特有型の三つがある。

内容は読んで字のごとくであり、前者の二つは誰であっても会得出来ると言われている。最後の種族特有型はその種族なら最初から持っているが、他の種族の者が会得するのは難しいみたいだ。

ちなみにおっさんの木々の声のスキルは多分種族特有型であり、他の種族は大樹曰く森にずっと住み着き、植物に話しかけ続け、人格的に優れた者が会得することがあるらしい。このスキルはエルフとか獣人の中に一世代に必ず一人は会得する奴が出るみたいだ。

さて、簡潔ではあるがこれがスキルの説明だ。なにかあれば後ほど詳しく語る部分もあるかもしれない。

次にスキルを得た時に聞こえてくる【】の声について軽くだが説明しよう。

とは言っても難しく考えるようなものではなく、世界を見守っている神様の声だという説が一般的（木達の中で）だ。人ならば違う見解を示していたりするのかもしれないが、おっさんもこれでいいと思う。

とゆーかこれ以外になにがあるの？ って感じ。おっさんの妄想って言われればそれまでだけど、大樹も昔は聞こえたって言ってるからおっさんの妄想説は否定させていただく。

ファンタジーなら神様が実在してるとかは十分有り得る話だ。

以後、この声のことを天の声と呼称することにしよう。

では、魔力を扱う修業編に行こう。

「ふううー、こおおおー、ぬううんー」

湖に浸かりながら唸るように腹の底から発声する。気分的には気功の達人みたいに気を練っていくような感じだ。

あくまでも気分だけの問題であって大した意味はない。

さて、なぜおっさんが湖に浸かりながらこんなことをしているのかと言うと、魔力を扱う技術として広く知られているものの内の肉体活性を会得するための修業の一貫だからである。

肉体活性。つまりは魔力を使つてのドーピングだ。これが出来れば肉体の限界の枠を越えた動きも可能となる。ただ、見た目や実感的なもののがわかりにくいために湖に浸からせてもらつてる。

とゆうのも目には見えない魔力の波動というものであつても、流体である水には波という形で影響を与えるからだ。視覚的にはわかりやすい。

そして今現在どうなつていのかと言うと、おっさんを中心として波が立っているわけだ。

……おっさんが動くのにあわせてだけどね。

水に指を突っ込んだら波打つ。これは当然のことである。

ただし、魔力の波動で波打てばもっとすごい感じになるらしい。

つまりはおっさんはまだ魔力を使つての肉体活性に成功してないわけだ。

「はあああ……ダメだ、出来る気がしない」

『まだ一日目じゃ。諦めるには早いぞい』

「なんかコツとかないわけ？」

『コツと言つても、体内に吸収した魔力を体中に行き渡らせるだけの話じゃ』

それが簡単に出来たらコツとか聞きません。

つーが無理。どだいおっさんには無謀な挑戦だ。

『まずはじめに吸収した魔力が今どこにあるかはわかるじやろ?』

もう諦めてバックレようかと思っていると大樹が今更なことを聞いてくる。

吸収した魔力の存在はなんとなく感じられる。なんか飴玉を丸呑みしたみたいに変な感じが体内の一部分にあるからだ。

「わかるよ」

『それを体中に送ってやればよい』

「だから、それがわからんのよ。どうやってやればいいわけ?」

『バシユツとやってギューンじゃ』

抽象的過ぎる……

もういいや。自分で考えてなんとかしよ。

イメージ。イメージが大切だ。

魔力を体中に行き渡らせるイメージ。

しかし、魔力とは無関係だった生を謳歌していたおっさんにはちょっとわかりにくい。

ならば魔力を電力に置き換えてみよう。そう、つまり今のおっさんは電池を積んだおもちゃだと思うことにする。

今はおもちゃに電力が伝わっていない状態。だから一切おっさんは動けない。

おっさんの動きによって波立つ水が静まってくる。

そして電池をプラスマイナスきちん確認した上で差し込むと導線を通っておっさんの体に電気の道が通る。

そんなことをイメージした。

すると、おっさんの周りの水が波立ち始める。徐々にその波は大きくなっていく。

『ほむ、出来たようじゃの』

大樹からも合格をもらった。

これで、おっさんは、人へと……進化する！

『さて、次じゃが……』

ですよー。

肉体活性が出来ただけで進化出来たら苦労しませんよー。天の声も聞こえねーし。

『魔力を使ったスキルを使用するのじゃ』
「なるほど」

『はつきり言うところが一番難しいぞい。なにせ、使いたいスキルの明確なイメージがなければダメなのじゃ。人の間では弟子をとったりしてスキルを伝えていくなどしてるそうじゃが、わしにはおぬしに伝えるべきスキルがない』

魔力を使ったスキルっていうと魔法か？

まあ、木がそんなもん持ってたらそれだけですげーわ。

それにしても魔法か……魔法ってステッキとかコンパクトミラーがないと使えないだろ。あ、これは魔女っ子の話か。

っーかよく考えたら魔法のアイテムとかあっても持てねーわ。

とりあえず、なんか魔法的なものをイメージすればいいんでしょ？
どうすっかなー。

あ、やべ……思考がかめ〇め波にしか辿り着かねーわ。魔法ではな

いけど魔法的な感じだしな。
おっさんも男の子ってことだね。

「かーめー〇ーめー……はーっ!!」
ジュルアーツ

え、うそ……なんか出ちゃいました。

おっさんの目の前の湖の水が割れ、それでも止まらずにかめ〇め波は突き進む。

ってやべーよ!? このままだと他の木とかにぶつかる! かめ〇

め波よ、消えろー!!

おっさんの願いが届いたのかかめ〇め波は木に届く前に消えてくれた。

ふうっ、なんとかなったか。

【エメラルドスタッグビートルは魔力波のスキルを得た】

【エメラルドスタッグビートルは進化の条件を満たした。進化するか?】

天の声まで聞こえた。

なんか進化するか? とかやたら馴れ馴れしいな。

しかしどうやらおっさんは進化できるようになったらしい。

『まさかこんなに早く習得するとはのう……おぬしには魔力を扱う才能があったようじゃの』

「……それほどでも」

他に比べれば時間がかからなかったのは確かだが、こんなんでいいの?

『よっぽどスキルをイメージする力が強かったに違いないわい』

それはあるかもな。

昔は胸が熱く燃えたものだ。いや、今もなお胸を熱くさせる作品だ。

『ならば、次の修業なんじゃが……』

「あ、ちよい待ち。おっさんもう進化できるよ」

天の声は本人にしか聞こえないため、大樹は次の修業をはじめそうになったので止める。

『え、嘘……マジ？』

「マジだ」

『まさか本当に進化出来るようになるとは……』

なんか聞こえたような気がするけど、気にしないでおう。

【進化するか？】

おっと、再度天の声から催促がかかった。

悩む必要はない。

おっさんは天の声に高らかと宣言した。

「進化する！」

そう宣言すると同時におっさんの体が熱くなった。湖に浸かっていたためにおっさんの濡れた体から水が水蒸気となって蒸発していく。頭がフラフラとしてきた。

呼吸も、心臓の鼓動も早くなっていく。

ついにおっさんは意識を手放した。

おっさん、進化の条件満たす（後書き）

書き終わってから、ふとクワガタに心臓ってあるのかと疑問に思ってしまった。

調べた結果、どうもないらしい。似たような働きの器官はあるみたいだけど……

でも、あえて書き直したりはしないです。

なぜなら主人公もクワガタには心臓がないと知らないからです。似たような器官（背脈管というらしい）を心臓と勘違いしていると思われるって下さい。

おっさん、進化後の姿を見る

暗い視界

奥までどのくらい遠い距離があるのか、それともすぐ近くにあるのか
そんなことすらわからない闇の世界

何も見えず、何も聞こえない

だがそこに何者かの気配を感じる

「あんたは誰だ？」

問い掛ける言葉に返答はない。

「おっさん、話し相手が欲しいんだけど？」

やはり何も答えてはくれない。

もしかして気のせいなのか？

よく心霊番組とか見た後に眠ろうと布団に横になった時に何者かの
気配を感じてしまうことはないだろうか？ おっさんはよくあるタ
イプだ。

だから今回もそんな感じのアレなのかもしれない。

沈黙の時間が流れる。

<■ちた■星■■つ>

何者かが言葉を発した。

どうやら何者かの気配はおっさんの気のせいではなかったようだ。しかし、不意打ち過ぎてよく聞き取ることが出来ない。

「もう一回言ってくれ。ワンモアセイプリーズ」

<落ちたる星は二つ>

正直意味不明だ。

こいつは何を言っているのだろうか。

「もう少しわかりやすい言葉を頼みます。オッサンが皆物知りってわけじゃないんだからさ」

<一つは強き光を放ち、もう一つは鈍く光る>

「なあ、何言ってるの？」

<強き光を放つ星は混沌を導いた>

「聞けて」

<鈍き光を放つ星は新たなる道を拓いた>

「おいこら、おっさんを見捨てるんじゃない。含蓄はないかもしれないが時たまいいこと言うんだぞ？」

＜混沌を導きし星にはその存在が混沌で身を滅ぼさぬよう既に悪意から己を護る最強の盾を授けた＞

もういいよ。

どうせ「このオッサン、マジうざーい」とか思ってたんだろ。

言っとくけどね。おっさん、女子高生とか全然興味ないからね。

諭吉三枚でどう？ とか言われても断固跳ね返すから。つーか説教するから。

英世さん一人の超安値だとしても……行っちゃうか？ いやいや、行かねーよ。むしろ勃たない。あ、別に歳のせいとかではなくて性癖的にノーサンキューなんです。

＜故に新たな道を開拓せし星にはその存在が途切れぬよう再生の泉を授ける＞

なんのことやら。

＜二つの星は交わりて互いを滅ぼさんとす＞

＜地上で輝ける星はただ一つなり＞

＜最後に輝くのは強き光か＞

＜それとも鈍き光か＞

＜世界は星の答えを待っている――＞

【エメラルドスタッグビートルは新たなる種虫人^{ムシビト}に進化した】

【虫人は再生の泉のスキルを得た】
【虫人は昆虫形態インセクトフォーゼのスキルを得た】
【虫人は千里眼のスキルを得た】
【虫人は剛力のスキルを得た】



「んう……」

目を開けるとそこには透き通るような青い空が広がっていた。

『おお、目覚めたようじゃな』

聞き慣れた声が聞こえて来る。

声のした方へと顔を向けてみると顔の右側が水に浸かってしまう。

「げほっ、ごほっ……うえっ、気管に入った」

慌てて起き上がり、手を口へと当てて咳込む。

そう、手を口に当てたのだ。

クワガタだった体では出来なかった行為。

口から手を離してまじまじと見てみる。

指は五本。関節の数も人間と一緒だ。

ただ、その手の甲や腕には無骨なエメラルド色のガントレットのよ
うなものが接着している。

次に体を見てみる。

こちらはガントレットのようなものと同じ色の鎧みたいなものを着ていた。いや、この鎧みたいなのこそがおっさんの体のようだ。だって、股間に赤黒いカブトムシの頭部が付いてるからね。

クワガタだったのにカブトムシが付くとはこれいかに。

足も同じく脚甲のようなもので覆われており、どこの戦士やねんと思わなくもない。

手の平や足の裏、太股の内側などは装甲みたいなものに覆われておらず、やや赤みがあった薄い黄色の皮膚が見える。感触も色も人間だった時のものと変わらない。いや、ちよいと肌にハリがあるかもな。

つーか顔は？

顔はどうなってんの？

おっさんは水面に自分を映して見てみた。

そこにいたのはどこぞの特撮ヒーローの方ですか？　とってしまったいそうな存在。

顔はフルフェイスの兜のようであり、その丁度人間の目のある位置に切れ長の鋭い赤い目らしきものがある。んでなぜか口の周りだけ剥き出し。エメラルド色の頭の頭頂部にはクワガタの顎を模した二本の角が生えている。

もう一度言うぞ、どこの特撮ヒーローやねん！

え……嘘。これが虫人とやらの姿？

つーかこれで人を名乗るわけ？

あ、でもちよつとかっちょいいかも……

でもでも、下手したら悪の怪人に見えなくもないかも。

うーん、この頭ってヘルメットみたいに取れたりすんのかな？

……無理だった。

つーかそれより股間っ！

何か隠すもの探さないと……

『三日も眠つとるから心配したぞい。もう大丈夫かの？』

おっと、大樹の存在を忘れてた。
つーか……

「そんなに眠ってたのか？」
『そうじゃ』

どんだけ寝てるんだよ。
とゆーかあれは夢だったんだろうか。

『それにしても無事に進化出来たようじゃの』
「ああ。とりあえずなんか下半身を隠せるものないか？」
『すまんが葉っぱくらいしか……』

オーマイゴッド！
んでも無いよりマシか。
そして大樹から一番大きな葉っぱを受け取り、下半身に当てて蔓で
固定する。
これでひとまずは安心だ。

「ふう、恥ずかしかった……」

露出狂でもないのに下半身丸出しはきついものがある。
おっさんは衣食住足りてる日本人なわけだしな。

『それにしても……けったいな存在になったのう』
「カッコイイじゃん」
『ほむ、本人が言うのならわしがどうこう言うべきではないな』
「そうしてくれ」

そう言っておっさんは湖から出て肩を回して歩いたり、走ったり、スキップしてみたりと体の動きを確かめてみた。
うん、久しぶりに二本足で活動したけど違和感とかは全くない。

「絶・好・調っ！」

無駄に叫んでしまった。

『ほむ、それは良かった。では、約束通りにこれをやろう』

大樹がそう言うのと遙か頭上からグレープフルーツ大の紫色の果実が落ちてきた。

それは万有引力に乗っ取り、かなりのスピードで地面に落下したにも関わらず一切傷が付いていない。
なにこれ……めっちゃめっちゃ怪しい。

「これは？」

『食べればわかる』

ますます怪しく思うが、さすがに今更大樹がおっさんをどうこうしようとは思っていないはず。

とゆーか毒でも大丈夫だし。

そう思いたった時不安は消え、果実を一口口にしてみる。

果実を一口噛むと甘酸っぱい果汁が口の中に溢れる。ぶっちゃけうまい。

貪るように一個を完食してしまった。

【虫人は斬撃無効のスキルを得た】

食い終わったと同時に天の声が聞こえた。

『どうじゃ？ うまくいったかのう』

「これって……」

『わしが長い生の途中で伐採されないために身につけたスキルを実として落としたのじゃよ』

そんなこと出来るのか？

いや、実際やったんだから出来るんだろうな。

それにしても斬撃無効とは……木としては生唾を飲み込むほど欲しいスキルではなからうか

『今更わしを伐採しようとする酔狂な奴もおらんから気にせず受け取ってくれい。おぬしがわしの我が儘に付きおうてくれたこと本当に感謝するぞい』

「いや、こちらこそ色々教えてもらって……」

『ところでじゃが！』

大樹に礼を述べようとしたところ、遮るように大樹が割り込んできた。

「……なに？」

せっかく礼を述べようとしたところを遮られたこちらは若干不機嫌だ。

つーかおっさんの感謝の言葉を聞けよ。

なんかモヤモヤすんじゃない。

『おぬしが起きる前に臨時で超長距離根っこワーク会議を開いて他の木に自慢したら、皆して嘘じゃとか言いおるんじゃない』

「……で？」

まあ、なんとなく先の展開が予想出来るが。

『じゃから他の木におぬしの姿を見せてやってくれんか？』

大樹の願いにどう答えるべきだろうか。

進化出来たのは大樹のおかげだし、願いを聞き届けてあげるのはやぶさかではないが、めんどいんだよな！。

「保留で」

『そこをなんとか』

「えーでも……」

『タファンの森の大樹だけでいいんじゃない？』

タファン？

えーと、確かエルフとドワーフの生まれた森だっけか。つまりは一番自慢できる立場にいる奴ってことか。

『別に期限は定めん。ただおぬしが生きてる間にタファンの大樹に会ってくれば良いのじゃ』

結局おっさんは大樹の願いを聞き届け、タファンの森の方向へと旅に出ることになったのだった。

おっさん、進化後の姿を見る（後書き）

さて、オッサンの進化後の姿はどうでしたでしょうか。

私の中では

クワガタ系仮面ライダー＋ビーファイターのクワガタ＋ライダーマン
そしてライダーで言う装甲が無い部分が肌って感じみたいなビジュ
アルです。

最初は完全なるライダー系の容姿を想像してたんですが、やはり『
人』なので『人』の部分がなくちゃねってことで今のイメージにな
りました。

まあ、あくまでも作者のイメージなんで細かい部分は読者様のイメ
ージで考えてもなんら問題ありません。

ただ、鎧みたいなの着てて、頭にクワガタの顎みたいな角がある、
エメラルドグリーン。この三つだけは外せません。

さて、あと五話以内にヒロイン出せるかなー？

とゆーかヒロインを出す前にあらすじをきちんと書こうと思います。
とゆーのも投稿するために適当に書いたものなので……

おっさん、人と出会う（前書き）

今回、会話文がちょっと読みづらいかもしれませんが。ニュアンスだけでも読み取って頂ければ幸いです。

おっさん、人と出会う

大樹の願いからタフアンの森に向かうことになったおっさん。

めんどくさいけど、生きてるうちに行けば期限は定めないらしいし、ゆっくりと行こう。

そう思ったおっさんはクワガタとして生まれ育ったミズドリウムの森を散歩するように歩いていく。

インセクトフォーゼ

おっさんのスキルの一つにある昆虫形態を使えば前のクワガタの姿になることが出来るため飛ぶことも可能だったのだが、せっかく二本足で歩けるようになったのだ。この感動が続くうちは歩きたい。途中で出会った肉食な動物達からは隠れて森の出口（便宜上そう呼ぶ）に向かっていく。戦ったりしないのかって？ 理由がないのに喧嘩を吹っかけるとか好戦的じゃないおっさんには無理な話だわ。戦わないで済むならその方がいいに決まってる。とゆるーか脳内で快楽に変換出来ない痛みは御免被る。

大樹から聞いたらしく、歩いていると色んな木々からおっさんが人へと進化したことへの祝福の言葉やこれからの旅路へ対しての激励の言葉がかかる。

うう……皆なんてええ木なんだ。優しくされると泣きそうになるな。年取ると涙腺が緩くなって困る。

おっさん、感動物にすこぶる弱いんだよ。

途中から見て内容が全然わかんなくても、最後の方だけ見て泣いたことなんてしょっちゅうある。

特に養子の子が自分は養子だから愛されていないと思ひ込んでたけど実は養父母にすごく愛されてた、みたいなシチュエーションにはすっごく弱い。

……こんな話はどうでもいいか。

む、そろそろ出口みたいだ。
そういや初めて森の外に出るな。
どんな世界が開けているのか実に楽しみである。

『あ、そこ危ないですよ』

「へ？ のあっ!？」

『人間がなんか仕掛けてましたから……って遅かったですね』

現在、おっさんは網に捕らわれた状態で宙吊りになってます。
これ、忍者とかかくせ者捕らえるための罠に似てんな。

『大丈夫?』

「あ、へーきへーき」

仕掛けを施された木がおっさんに話かけてくる。先ほどのちょっと遅い警告もこの木のものだ。

「獲物がかかったどーっ!」

「よっしゃー! 久しぶりに肉が食えるべ」

「わーのしかげがよかったんだがらな」

「オラの戦術眼がよかったんだべ」

ほどほどに訛りのある言葉で現れたのは四人の屈強な男達。

全員、皮の鎧に身を包み込んでおり耳とかの諸々のパーツは人間と
変わりない。明度の違いはあれど全員黒髪であり、どこことなくアジ
アンな顔立ちをしている。

なんかこえーな。

ダンディハント

オヤジ狩りの一団じゃねーよな？

「さーで、獲物は……あれ、なんだべ？」

「人でねーが？」

「おいおい、やばぐねが？ 間違って人ば毘さかけでまった」

「おーい、大丈夫だが？」

ふむ、話し合いを聞くにいい人達っぽいな。

「大丈夫大丈夫。それより降ろしてくれない？」

「へば、ちよっとこさ待つでろ」

しばらくして地面へと降ろされた。

「すいませんでした」

四人が揃っておっさんに頭を下げる。

「まさか、こんな田舎いながの森に人が入ってくるなんて思っでながった
はんで」

「いやいや、おっさんも驚いたよ。巧妙な罠仕掛けるねー」

「だべ？ 自信作だ」

男達の一人が下げてた頭を上げて誇らしげに語る。

「自信があるのもわかるな。全然わかんなかった」

まあ、考え事してて注意力が散漫だったただけだが。
そうじゃなかったら、木の注意によって避けていたことだろう。

「んでも、ホーシラビットとがを捕まえるにはこんぐれえの罠じゃ
ねーとダメなんだ」

「あいづら、ちょっとした違和感を感じたら罨にはちがよんねーがんな」

「んだんだ」

ホーンラビットって、あのロップイヤーさんか？

忘れもしない、寝てるおっさんを角で突いてたあいづらの姿だけは！……よく考えたらあんまり恨みに思っていないんだよね。どうでもいいって言うか……

「ホーンラビットってうめーの？」

「ん？ まあ、そこそこだな」

「ハイキングベアーの方がうめえげっちょ、ありやつええがら」

ハイキングベアーとは多分二足歩行してた熊のことだろう。

おっさんはこいつを見かけたらすぐに逃げる。

「うん、そっか。大変だね。じゃあ、とりあえずお詫びの品をくれ」

「は？」

「え……」

場が哑然とした空気に包まれる。

そりゃそうだ。

元々の話、獲物を捕らえるために仕掛けた罨にかかったマヌケはおっさんの方ではある。罪悪感もあって謝罪した彼らではあったが、おっさんの友好的な態度に胸を撫で下ろしていたに違いない。だが甘い。

普段のおっさんなら笑って許して終わりだろうが、今のおっさんの状況は無一文。

こうゆう機会は活用せねば。

「えっと……」

「とりあえず金銭での詫びを入れてくれ」

「オラ達、ほとんど自給自足だから……金はあるま持ってねえ」

「よしわかった。あんた達全員その場でジャンプしろ」

おっさんの言葉に対して男達は素直にその場で跳びはねた。

おっさんは素直な奴は大好きです。つーか素直すぎる気もするけどね。

そして男達のジャンプに合わせて聞こえる金属音。

「お、持ってんじゃん。出しなさい」

「い、いや……これはナイフの音だあ」

「とりあえず出しなさい」

無駄に強気なおっさん。

だがしかし、内心逆上されたらどうしようかとドキドキものです。

だけどこいつらのオドオドした感じが、その心配は杞憂だと思わせる。

オッサンとは反発する若者は苦手な奴が多いが、従順な若者には強気な生き物です。おっさんもその内の一人さ。

差し出されたのは刃渡り10cmちょいの外見果物ナイフみたいな物。つーか果物ナイフにしか見えない。

りんごでも採りにきたのか？

まあ、毒りんご的なのかないけどね。

狩りに出た人間の装備としては貧弱だ。ナイフの良し悪しが分からないおっさんでもこれはナマクラだと判断出来る。

「はい、返す」

「あ、どうも……」

「他の奴らも提出ー」

おっさんの声にまたも男達は素直にそれぞれ金属音の元を差し出してくる。

ほんと、こんなに素直で良い奴ら初めてだ。

差し出されたのは全員似たり寄ったりの品で、おっさんの食指は全くといっていいほど動かない。

「はあ……」

自然とため息がこぼれる。

ため息をひとつ吐くと幸せがひとつ逃げてくなんて俗説もあるが、この際仕方ないだろう。

「……なんが、すいません」

謝られた。

こいつらは全然悪くないのに。

やべ……おっさんの罪悪感がチクチクと刺激される。

「こちらこそ調子に乗ってしまったようで……」

「いやいや、オラ達が悪いんです」

「んだんだ。貧乏で何もあげられるもん持つでねえのがわりいんだ」

「お前ら……」

いい人過ぎやしませんか？

「好きだぜ」

「……え」

「あ……」

「ぬう……」

「オラ、嫁っこがいるんだげっちょ……」

「そういう意味ではない。おっさんは女好きだよ？」

めちやくちゃって頭に付くくらいな。

「それにしても優しいのはいいが、優し過ぎるぞお前ら」

「だって……なあ？」

「ああ」

「んだ」

「何？　なんで知り合い同士、目で会話してんの。おっさんも話の輪に入れてよ」

「だつて、あんた……鎧は着てっけども股間は葉っぱで隠^{かく}してるぐらいだから、哀れで……」

……うん、まあ、そうだね。

おっさん、そんな格好してたね。

自然と受け入れてたよ。

とゆーか胸とかは鎧じゃなくて一応、おっさんの肌なんだけだね。
感触あるし……

つまり、全裸に葉っぱだけだった。

「……じゃあ、腰に羽織るもんじゃない？」

「どんぞ」

差し出されたのは四枚のタオル。

おっさんはそれで簡易版の褌^{ふんどし}を作成し、葉っぱの代わりに股間を隠すのだった。

……あ、激しい動きだと取れちゃうな。

おっさん、人と出会う（後書き）

いつか来るかもしれない質問を先に回答しておきます

Q. なぜ言葉が通じるのか？

A. ファンタジーだからです

Q. 主人公は戦わないのか？

A. そのうちあるかもしれませんが、少なくともそこそこ先の話です

Q. 主人公の名前って？

A. 一応、次話にて名乗る予定

私が現段階で思い付くのはこれくらいですかね。

他に何かあれば遠慮なくどうぞ。ただ、ネタバレになるような質問には回答できません。

おっさん、名乗る

タオルのお礼と言ってはなんだが、スキル木々の声を活かして狩人達の狩りを手伝うことにした。

要はホーンラビットがよく通る道やホーンラビットの餌場などを教えてもらえばいいだけの話だ。樹木達はおっさんの味方なので基本的に何でも教えてくれる。

狩人達も良い狩場知ってるよと言ってやったら両手を挙げて大喜びした。

そんなに喜んでくれるのは嬉しいが、結果が出てからにして欲しいものだ。

あと、もう少しおっさんの素性を疑うとかないわけ？

客観的に見ると結構怪しい奴よ？

まあ、説明するのもめんどくさいから聞かれない方が都合いいんだけどね。

よし、気分がいいからサービスだ。食える山菜とかキノコも採ってやんよ。

結果として狩りは成功だった。

成果はホーンラビット六匹。いや、ラビットだから六羽の方が正しいのか？

とりあえず成功だ。

おっさんの指定したいくつかのポイントに狩人Cがおっさんの引っかけた罠を設置し、獲物がかかるまでひたすら待つ。そしてかかった獲物を狩人A、Dと協力して捕まえる。その後にもた罠を仕掛ける。

これを狩人達が繰り返している間におっさんは狩人Bを連れて食用

植物を取りに行った。

狩人Bもそこそこ食用植物には詳しかったが、木の声を直に聞けるおっさんほど森の植物に詳しい奴はいない。

一時間もすれば両手に抱えきれないほどの食料を得た。

それにしても動物を殺す瞬間って惨いよな。おっさんも真つ当な人間だった頃に田舎で飼ってた鶏を絞め殺して羽根^{ばあちゃん}ったことあるけど、途中で祖母^{ばあちゃん}に変わってもらったもん。今じゃ、食料確保してる間に時々見かける事のある弱肉強食の世界によって見慣れた光景とは言え見ると気持ちが悪くなってくる。

「大丈夫だか？」

「……そんなに大丈夫じゃない」

「あんた、グロ耐性のスキル持ってないのが？」

グロ耐性のスキル。

そんなもんがあるなら是非とも欲しいもんだ。

「どうやっ……」

どうやったら獲得できる？ と聞こうとした口を閉ざす。

スキルを得る方法は経験か修業。

ならばグロいものを率先して見たり、運悪く見てしまった奴が得るスキルなのだろう。

ネット画像とか写真とかならまだいいけど、隣でグチャグチャやってんの見るのはいやだ。

「大丈夫だあゝ。解体作業ば百匹も見れば取れっからゝ」

励ますな。

別にグロ耐性ないからって落ち込んでるわけじゃない。

「んでも、これだけ取ればカカアに怒られなくでいいな」

「これもあんたさんのおがげだあ」

「あんたも村さ来い。わーの作った野菜ばやる」

「オラの作った野菜はうめど」

すっげえ笑顔でおっさんの方を見てる狩人達。

笑顔が眩しいぜ。

それにしても、野菜作ってる奴ってお礼とかに大抵自作の野菜あげるって言い出すよな。おっさんの実家の連中もそうだったし、農家の友達もそうだった。

まあ、嬉しいんだけどね。

「狩人A、B、C、D……じゃあ、誰か泊めて？」

沈黙が降臨した。

なんか悪いこと言ったかな？

あれか？ 「泊めて」はまずいか？

芸能人が田舎に泊まるテレビ番組でも難儀することがあるからなー。でもテレビが入るわけじゃないからハードル低くね？

いや、よく考えると今日会った奴を泊めること自体がレベル高すぎか。

例え彼らの家が掘っ建て小屋であっても褒める自信があるのに残念だ。

「なあ」

沈黙を破るようにAが口を開く。

「狩人エー、ビー、シー、デーっておら達のことだが？」
「うん、そうだけど？」

なるほど、まずは他愛ない話をしつつお泊りを拒否るわけだな。
はつきり言ってくれていいのに……

「そういえば、お互い名乗りあってながたな」

「まんず名乗りあうのが礼儀でねえが」

「んだ」

というわけでお互いに自己紹介する運びとなった。

とりあえず簡潔にまとめていこう。

「だば、おらがらいぐが」

狩人A。本来の名前はスノー。

スノーとか言いつつ、肌は日に焼けて茶色だ。

彼は四人の中で一番でかい。

また、Aを冠するだけあって彼らの中のリーダー的存在だ。既婚者。

なお、嫁の尻に敷かれているらしい。また、嫁が妊娠中。

「次はわの番だな」

狩人B。本来の名前はトイース。

一緒に森で収集した男だ。

顔立ちはまだ二十代だというのに可哀相な頭をしている。でも既婚者。

「だらわーがいぐど」

狩人C。本来の名前はスサウ。
罨の名人。

身長は小学生くらいしかないけれども、あごひげの影響でかなり年
がいてるように見える。やはり既婚者。

「最後はオラだな」

狩人D。本来の名前はウエスト。

他の三人に比べると細い。だが、筋肉質だ。

また、彼らの中では頭がいらしい。はあ……既婚者。

全員既婚者だよバカヤロー！

なんだよ。三十過ぎても結婚出来なかったおっさんへの当てつけか？
くやしくないよ？ だって、三十過ぎても結婚してない野郎なんて
いっぱいいるしー。

「んで、あんたは？」

今度はおっさんの番のようだな。

「おっさんの名前はたか……」

ちょっと待て。本名を名乗っていいものか……

こいつらの名前を聞く限り日本的な名前だと浮いちゃわね？

とゆーかすでに以前のおっさんは死んじゃってるわけだから新しい
名前が必要ではなからうか。

とは言っても西洋風な名前なんて咄嗟に思いつかん。本名を振る^{もじ}か？
……ないな。

うーん……一旦持ち帰って考えたい。

だけど、考えれば考えるほど坩堝に嵌まる気がする。

だったら……こうしよう。

「おっさんには名前がない。この森で生まれ、この森で育ったが故に。だからどうだろう、君達がおっさんに名前を付けてくれないか？」

「おら達が？」

聞き返すスノーに頷いて返す。

自分で名前を考えるのが面倒ならば、他人に考えてもらおう作戦だ。

「でも、なんでわー達が？」

「んだ。自分で付けらればいーべ」

まあ、こうくるわな。

理由がめんどくさかったからじゃダメだよな。

どうやって言い訳しよう……

「それはだな……」

考えろ。考えるんだ。

自分を叱咤激励する。

すると、天啓のようにパツと頭に最適な言い訳が浮かんだ。

「名前ってのはさ、自分で付けるものなのか？ 君達だって親に付けられただろう？ つまり、血の繋がりがあるとはいえ他者に名付けられたはずだ」

おっさんの言葉に四人が理解の表情を浮かべる。

「だからこそ、信用出来る君達におっさんの名前を付けてもらいたいんだ」

ここで信用してることもアピールしておいて、お泊まりの許可をもらいやすくする算段を練る。

ふふふ、おっさんたらなんてクレバーなんだ。

「よ、よし。おら達がいい名前付けでやっから！」

「任せどげ^{まが}」

「どんなんがいいべ？」

「テソロとかどんだ？」

「それは今度生まれるおらの子供の名前だべ！」

四人で固まって話し合ってくれている。

はてさて、一体どんな名前を付けられるのかな？

よほど変じゃなければ、どんな名前であっても受け入れるつもりだ。その名前でこれから生きていこうと思う。

近くにある木に寄り掛かって座り、結果を待つことにする。

『あんっ』

「おっと、すまん」

どうやら寄り掛かった時に木の性感帯に触れてしまったようだ。

『いいんですよ。それより名前付けられるみたいですね』

「え？ あ、うん」

『その旨を報告したら、ラウルス様がわしが名付けると言っていましたよ』

「へー」

ちなみにラウルスとは大樹の名前である。

だけとおっさんの中では大樹は大樹。名前などない。

「参考までに何て言ってるの？」

『えーと、ですねえ……ムシビト1かムシビトaで迷ってるそうです』

「却下つつといて」

『はい』

大樹に名前付けてもらうことを考えつかなくて良かった。

そういえば、修業中にこの森のほとんどの木の名付け親は大樹だと聞いたことがあったな。あの杉15065みたいな感じのセンスのカケラもない奴。

絶対名付けられたくないね。

自分の案が即座に却下されたことで大樹が激しく落ち込んだ事はここで語るような事ではあるまい。

そうこうしている内に話し合いの終わった狩人達がおっさんの元に近寄ってきた。

「いい名前付けてくれたのかな？」

「最終的に三つ候補がでぎだ」

「ふーん、そっから選ぶわけね」

おっさんにも選択肢を与えることで、華を持たせてくれてるのかな？

「どんなのがあんの？」

「エメ、ラルド、グリーンの三つだ」

そっかその三つの中ならどれかな〜……って!?

「なにそれっ!?! 全部見た目からじゃん! なんでそんな安直になった？」

エメ、ラルド、グリーン。繋げて読めばエメラルドグリーン。まだまだ。

「いや〜、パツと思いつぐのがなくてえ」

「スサウがプリンプリンとかふざげっからあ〜」

「おめだって、悪ノリして名前ばアナルにしようとか言ってたっぺ」

なんでこいつらこんなに学生のノリなの？

判断間違っちゃったかな〜。

とりあえず真面目に考えてみる。

プリンプリンとアナルはないな。

でも、アナルって響きはちょっと惹かれるものがあるから将来息子が出来たら案として使わせてもらおう。

んで、エメラルドグリーンに関してだが、安直ではあるがわかりやすい。

面倒だし、この中から選ぶう。

まず、エメ。

エメさんと呼ぶる姿を想像してみる。

なんかひょうきん者のイメージだな。ダンディーなおっさんには合わない。よって却下。

次に、ラルド。

これ単体で見れば、そこそこな代物だ。響きがいい。おっさんの名

前の第一候補にしよう。

最後に、グリーン。

歌を唄うイメージがある。響きは悪くない。だけどどこことなく主人公のライバル的ポジションっぽい感じがするのはなぜだろう？

「ラルドだな」

吟味した結果、やはりこれが一番しっくりくる。

「おっさんの名前は今日からラルドだ」

「そうが」

「よろしく、ラルドさん」

「いい名前だあ」

「名付けだオラ達も納得だべ」

【虫人は固有名ラルドを得た】

天の声が聞こえた。

おっさんの名前はラルドで本決まりしてしまったようだ。

だが、これでいい。

おっさんはこの世界で生きていくのだから。

こうして名前を得たおっさんは狩人達に付いて行って、彼らの村へと訪れるのだった。

ちなみに泊めてくれと頼んだ時に沈黙が降りたのは、おっさんが自分達を記号の如く認識しているのに気付いてちよつと傷付いたためらしい。

泊める事自体は奥さんに聞いてみないとわからないとのことだった。

なお、おっさんはラルドという名前が豚の脂ラーのことだとは知る由も
なかった……

おっさん、名乗る（後書き）

固有名詞はだいたい適当につけてます。

主人公の名前も本当にエメラルドグリーンから取ったんですが、まさか適当に取った名前がこんな意味を持つとは……

まあ、ありかなしで言えばあります。むしろ彼には合ってる気がします。

おっさん、旅立つ

「ラルドさーん、このキノゴって食べっぺか？」

拝啓、大樹様。

「おっさんは食べる。だけど、トイース達はダメだ。食ったら体が痺れて動けなくなるぞ？」

お元気ですか？

まあ、根っこワークでお互いの近況はよく知ってるでしょうが、改めて報告しようと思います。

「危ねーどごだったなー」

おっさんは今、三ヶ月ほど前に出会った狩人達の村で彼らと同じく狩人として生活しています。

「この実は食べるべか？」

最初は苦難の連続でした。

だって村人の視線、特に女性の目がドライアイスみたいに冷たかったからです。

「うん、食べるよ。スノーの嫁さんみたいに産後の人なら丁度いいんじゃないか？」

それもこれも、村に着いた時におっさんが腰に装着していた簡易型の褌ふんどしが外れていたのにも関わらず、それに気付かないで村の中を闊

歩したのが悪いんだと思います。

露出狂の誤解を解くのに大変苦労いたしました。

今ではちゃんとした禪を着用しています。あくまでも禪のみで、他はなんも着てません。なぜなら装甲的な身体のせいでおっさんに合う服がないからです。

まあ、慣れましたけどね。

「おお、キャロルにいいつつーんならいっぱい採って帰んべ」

女性の反応はすこぶる悪かったとしか言いようがありません。

あっちに行つては逃げるように視界から消え去り、そっちに行つては露骨に嫌な顔をされました。

だけどなぜでしょうか。

……ゾクゾクしました（悦）

「キャロルって、いいケツしてんだよな」

あの冷たい視線がたまりません。

しかし、彼女らは皆旦那付きです。つまりは人妻。

基本的に旦那が知らない野郎なら大興奮してしまうのですが、先に旦那達と仲良くなってしまうと、人妻と言うよりも○○の嫁と思つてしまい、正直萎えます。ゾクゾク感は半減です。

おっさんは友人の嫁に手を出すほどひとでなしではありませんからね（笑）

「ラルドさん。いや、ラルド……嫁に手え出したらぶっ殺すかな
！」

あ、友人も増えました。

男なんて一緒に酒飲んで夢でも語り合えば、そこそこ仲良くなれま

す。

あとの夢なんかねえよって奴らは、下ネタで落としました。
どこいっても男のエロさは変わらないなとしみじみ思いました。

「いや、キャロルはケツはいいんだが、胸が更地過ぎて欲情しないんだよね。だからスノーはきつとロッククライミングが趣味なんだと常々思ってる」

話は変わりますが、つい先日、村の畑におっさんが植えた作物の収穫がこの間ありました。

早過ぎると思うかもしれませんが、実はおっさんには植物の成長を促進する秘められた能力があったのです。

「それは抱いてるおらに失礼しつれいでねえが。キャロルは確かに胸たすはねえけれども、美人だ」

きっかけはおっさんが種蒔きに参加した後のこと。

成長具合が気になって仕方がなかったので、早く芽を出せと祈ったことからはじまります。

その後、あれよあれよという間に作物が成長していったんです。
これによって、おっさんはどうやら植物成長促進というスキルを持っていたことが判明しました。そういえばエメラルドスタッグビートルになった時にそんな感じの天の声が聞こえたかもしれません。

「うん、美人（笑）だよな。ま、おっさんはもっとボン・キュッ・ボンなおねーちゃんがいいけど」

植物成長促進のスキルが判明してから女性達の態度がすごく軟化しました。

でも、どこことなく残念な気持ちなのはなぜでしょう……

「だったらオラの嫁ば狙ってんのが？」

村長さんにも村人として永住しないかと言われました。

おっさんとの心の距離を縮めようと必死なのが端で見ててもよくわかります。

「ウエストの嫁ははっきり言って顔の造形が好みじゃないなー」

どうするかはまだ決めてません。

だけど、わりと前向きに検討しようかと思っています。

「ラルドさんは女の好みにうるさ過ぎるんでねえべが？」

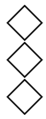
この村はおっさんに仕事をくれました。

そしておっさんが生活するのに必要な物を無償で提供してもらいました。

「好みってゆーか、二十五歳以上でナイスバディな美人がいいってだけ。これだけ満たせばどうでもいい。おっ、美味そうなキノコみっけ」

仕事ではいなくてはならない存在として重宝されています。
無駄に自信がつけました。

落ち込むこともあるけれど、おっさん、この村が好きです。



「明日にでも村出ることにした」
「……え？」

突然のおっさんの発言に驚いた表情でその場にいた全員がおっさんの顔を見る。

今度は何を言い出したんだコイツ？　みたいな表情がありありと浮かんでいる。

ここは村で唯一の酒場。

内装は西部劇にでも出てきそうな造りで、扉は例のパコパコするタイプのやつだ（ウエスタン扉）

二階に宿泊も出来るので、おっさんは現在そこに住まわせてもらっている。

今日は狩りの成果もそこそこ良かったので東西南北の四人と祝杯を挙げてるといわけだ。

ちなみに東西南北とはトイース、ウエスト、スサウ、スノーをいくりにした呼び名だ。

その現場にておっさんは自身の今後の予定を告げた。

はっきりいえば急な話だ。おっさんは事前になんのそぶりも見せたことはなかった。とゆうかさっき決めたんだから当たり前だ。

突然の引退は周りに迷惑をかけることも理解している。

だけどおっさんは元々外様だし、問題はないと思う。

手紙口調でこの村が好きだと言ったが、ずっといるとは一言も言っていない。

あくまでも前向きに検討すると言った政治家答弁だ。むしろこうい

う発言が実現されることはあまりないのではないだろうか？

つーか最近、大樹が「まだタファンの森には行かんのか？」って根っこワークを通じて村にある木に言付けてくる。

どうやら永住しそうな勢いで村に馴染むおっさんを杞憂してるらしい。

そこまで自慢したいのかよ。

「随分と急でねえが？」

「んだ」

「用事があるんだよ」

「だけんども……」

引き止めようと言葉を紡ぐ東西南北の面々。

お前ら、そこまでおっさんが好きか。

人気者だなー。

だけどな、おっさんが村を出る決意をしたのはお前らのせいでもあるんだぞ？

ぶっちゃけ羨ましいんだよ。

嫁と仲良くキャツキャウフフしやがって……

目に毒、心に罅ひびなんだよ。

この村は二十歳越えた奴は男女を問わず、ほとんど結婚済みだ。

なんかしらないけど心に焦りが生まれる。

結婚願望はそれなりだったんだけどなー。

まあ、でも……

「いつかこの村には帰ってくるよ。今度は嫁を連れてな」

農家とか狩人とかはおっさんの的には天職っぽいしな。
それにやはり東西南北との固い友情はあるわけだし。

「……だったらー、せめでもう少し出発^{すじ}ば延ばせねえべか？」
「んだ、明日ってのは急過ぎるっぺ」

いや、確かに急だけどさー……

「事前に言ったら村長が全力で引き止めにきそうなんだよなー。それに……」

「それに？」

一拍置いて四人の顔を見回す。

おっさんが何を言うのかを期待して、生唾ゴクリって感じた。
やれやれ……なら、その期待に応えてやろうかな。

「親しい奴にだけ告げてフラリと消えるってのかつこよくね？」

さすらいのダンディさ加減に痺れるぜ。

「ねえわ」

東西南北が口を揃えて言った。

まったく、ダンディってのが分かってねーなー。

翌日、宣言通りにおっさんはまだ日も昇っていない早朝に村を出た。
村人の朝は異常に早いんだから仕方ない。

起きられなかったらまずいのでおっさんは徹夜だ。
ずっと酒を飲んでいた影響でフラフラである。

見送りは四人の男達のみ。

こいつらもおっさんに付き合っただけで夜通し飲んでたので具合が悪そう
だ。

なんかもう、出発は明日でもいいんじゃないかと思わなくもないが、
そしたら明日は明日でこんな状態になってそうなので無理を推して
今日出発する。

「ここらで見送りはいいぞ」

「だらもう家さ帰るじゃー」

「んだらまだなー」

「まだ来いよ」

「だらまんつ」

名残惜しさは微塵もない。

わりとあっさりと東西南北は背を向けて歩き出す。

さ、寂しいなんて少ししか思っていないぞ？

去っていく東西南北の背を見つめていると、不意にスノーが振り返
る。

「ラルドさーん！ 嫁ば見つけだらまた帰ってこいよー！」

そしてスノーと同じように三人も振り返りおっさんへと声をかけて
くる。

「帰っでくるまでにラルドさんの家ば造っておぐがらなー」

「いい女つがまえろよー」

「とりあえず素を出すのは控えどけー」

口々に投げかけられるエール。

そう、彼らと交わした言葉にさよならはない。

いつか再び会えると確信し、『また』と全員が言った。

おっさんは四人の気持ちに応えるように声を張り上げる。

「また……ウツ……」

やばい……声を張り上げたせいで胃から込み上げてくるものが……
ここで込み上げてくるのが涙でなくてどうする！

ゲロはダメだ。

折角の微感動場面が台なしだ。

せめて……あいつらが各々帰るまで耐えるんだ……

くそっ、いつまで手を振ってやがる。さっさと帰れ……

くそっ……もう……ダムが……決壊する……

――しばらくお待ち下さい――

はぁー、スッキリした。

んじゃいこつと。

背後は振り返らない。

むしろ振り返ることができない。

おっさんの吐瀉物はそのままだ。

きつと大地へと還り、綺麗な花を咲かせることだろう。

こうしておっさんはやっと旅に出た。

東西南北の四人は折角の旅立ちのシーンを台なしにした一人の男の背中が見えなくなるまで見送っていた。

「吐いだな」

「うん、吐いだ」

「盛大にな」

「台なしだべ」

「んでも、ラルドさんらしいな」

「あ、それわかるべ」

「あん人はあれでいいんだ」

「ちゅーか、わーもなんが吐きそうなんだけど……」

「もらいゲロかよ」

「あ、ダメだ……ウォエッ！」

「あーあーあー……」

「まったく……」

四人は笑い合いながら家路へと向かう。

四人が一晩中飲んでいたことによって無断外泊の形になってしまったがために、嫁が家でどういう心境で待っているかなど考えもしないで……

ちなみに最も被害が大きかったのはスノーであった。

おっさん、旅立つ（後書き）

オッサンの村での生活をダイジェストでお送りしました。
植物成長促進のスキルは作者自身も忘れかけてましたね。

おっさん、捕まる

それは今にも雨の降り出しそうな雲に覆われた日のことだった。
すでに村から旅立って四日というところだ。

たった四日と侮ることなかれ

おっさんは昆虫形態インセクトフォーゼのスキルを使ってクワガタの姿になることが出来る。

つまりは飛べるのだ。

そんなおっさんの移動距離は一般ピーポーとは比べものにならないほどだからね。

まあ、初日は途中でへばってあんまり進めなかったけど……

だけどそれを帳消しにして有り余るオッサンの勇姿。割れながら惚れ惚れする。

しかしなんだな。

おっさんは性格のせいなのか分からないけど、わりと友達はいるタイプなのよ。

まあ、逆に嫌われる場合はとことん嫌われやすくもあるんだけどね。
まあ、それは置いておいて、つまり何が言いたいかというと……おっさんは寂しいんですっ！

そりゃ、移動をやめればそこらにある木に話しかけて相手してもらうんだけどさー。移動中はそんなこと出来ないわけで……

東西南北の奴らと交流持ったことで人と触れ合うことを思い出して寂しさ倍増しちゃってんだよ。

一人旅も嫌いじゃないけど、ワイワイ楽しい旅の方が好きだ。

旅は道連れって言うんだし、東西南北の連中も連れてくりゃよかった。

どっかに旅してる集団とかいないかな？

いたら混ぜてもらうのにな。

まあ、おっさん以外全員が知り合いつて状況は疎外感が半端ないけど、話を下ネタに持っていけばおっさんのターンに持ち込める。

「なあ、周辺に誰かいらないかな？」

ということとで近くにいる木に周辺の情報を聞いてみる。

木の一本も生えてない荒地などなら別だが、一般的な大地の状況について彼らが知らないことは少ない。

彼らは無駄に他人の秘密を知っている。また、それを木にしか言えなかった反動なのかやたら口が軽い。トイースが外で嫁と子作りに励んだ場所とかはあんまり聞きたくなかったぜ……

『任せんしゃい。十秒あれば根っこワークで周辺の奴らから情報がくるけん』

何より、何度も言ってる気がするが、こいつらはおっさんに協力的なのだ。

おっさんのことは根っこワークを使って情報がいつてるらしく、いきなり話しかけても嫌がったり疑問を感じることはなく、むしろ喜々として話し合いに応じてくれる。

程なくして、周辺にいる者達の情報を受け取ったおっさんはそういったところへ向かった。

その集団の姿はそう動かないうちに見えた。

とは言ってもまだ距離はそこそこ離れている。

しかし、おっさんの目には新聞の活字よりはっきりとその様子が見て取れた。

これはおっさんが進化することで手に入れた千里眼のスキルの恩恵だ。

千里とは大体四千キロくらいだった気がするが、さすがにそこまでは見えない。しかし、十キロぐらいならば余裕で見ることが出来る。本気を出せばもつといけるに違いないが、まだ試してはいない。とゆうーか青看板みたいな「〇〇まで〇キロ」みたいな指標がないからしょうがないよね。

さて、話は変わって集団の様子を述べよう。

集団とは言っても見える範囲には五人しかいない。テントを張ってるからその中に誰かいるかもしれないので、五人以上ということだ。それでこの集団、物々しいことこの上ない。

体には重そうな鎧、腰や手には剣やら槍やらを携えている。

顔はやの付く職業のお方みたいな強面で、傷やら入れ墨みたいなのが付いている。

ぶっちゃけ怖い。

なんつー物々しい集団なんだ。

こんな奴らに財布出せって言われたらおっさん即効で逃げるぞ。

え？ 差し出さないのかって？

嫌だよ、もったいない。

あいつら人からカツアゲした金で絶対キャバクラとか風俗行くんだよ？

おっさんだって滅多にいけないっつーのにそのおっさんの金で行くとか許せますか？ いや、許せません。

それで捕まって殴られて脅されるならそれがおっさんの運命。逃げられたらラッキー。

むしろ財布に入ってる免許証やら保険証見られる方が怖いよ……

まあ、なんだかんだ言っただけでそういう方々とともに出会ったことがないから好き勝手言えるんだけどね。

うーん……それにしても声をかけるべきかかけざるべきか悩むな……普段なら悩まずにスルーするんだが、寂しさ募るばっちなおっさん的には会話出来るならこの際ヤーさんでもいいか思っただけで……ん？ スルーする？ ぶほっ！ スルーするとか秀逸なダジャレが偶然出来てしまった。言いたい。これは誰かに伝えたい。

よし、彼らに言ってみよう。

なーに、おっさん渾身のダジャレに全員大爆笑するだろうから全てはノープロブレムだ！



などと、浅はかにも思っていた時期がおっさんにもありました。現在おっさんは縄で縛られて轡を嚙まされて地面に横たえられています。

なぜ、こんな状態になったのか。

理由は簡単に推測出来るかもしれんが、あえて言おう。

おっさんは盛大に滑ったのだ！

あれだよな。

発見されて開口一番に「貴様何者だっ！」とか「怪しい奴めっ！」とか威圧的に言われてんのに「あんた達が見えたから仲間に入れて

貰おうと思ったんだ。ホントはスルーするとこなんだろうけどね？
スルーする、スルーする……笑えない？」とか言ったのがダメだったのだろう。

もう、ダジャレを放った瞬間に「あ、これダメだ」と思いましたよ。それなのにダジャレだってことに気付いてない可能性を考えてスルーするってとこの説明までしちゃった。

寒さは倍率ドン更に倍。

清々しいまでに事態は悪い方向に転がり、怪しい奴ってことで取っ捕まった。

縛ったのがむさ苦しい男なら轡を噛ませたのもむさ苦しい男。

テンション下がるわー。

せめて女はいないものか。

「報告にあったのはその男かしら？」

おっさんの想いが天に届いたのか、鈴のような響きを持つ声がおっさんの耳に届く。

視線を動かしたおっさんの目に飛び込んできたのは、深紅のローブを身に纏う高校生くらいの女の子の姿だった。

周りにいる男達よりも頭一つ分は背が低いが周りの男達はおっさんよりもでかいので、女性としては高身長であろう背丈。これだけ見ればおっさんのストライクゾーンにいるのだが、腰元辺りまで伸びたローブに負けないくらいに鮮烈な赤色をした髪をツインテールにしており、それが彼女の容姿を幼く演出している。ま、胸の發育具合が残念なのも一つの要素か。勝ち気そうに釣り上がった瞳やこちらを見て微笑む仕草などはおっさんの好みなのだが残念なことに……

おっさんの好みではない！

要はストレートだったらストライクだったのに、大きく縦に割れるカーブを放ったせいでベース手前でワンバウンドしてキャッチャーに届きました的な感じ。

美少女ではある。それは認めよう。

だが、おっさんは美少女には興味がない。美少女から美女にクラスアップしてからお会いしたかった。あ、胸ももう少し成長して欲しいな。

「アイリス様、この者いかがでしたでしょうか？」

「殺しなさい」

はい？

え、何て言ったのこの娘？

殺しなさいとかいきなり過ぎやしないか？

もしかしておっさんの心の声が聞こえちゃったのかな？

「かしこまりました。おい」

重厚な鎧に身を包んだ巨漢の声に、おっさんの近くにいた細身の男が腰から剣を抜き放つ。

その剣は鈍い光を放ちながら上段へと振り上げられた。

「んーんー！」

必死に止めてくれるように声を張り上げるが、如何せん轡によってその声が他者に理解されることはない。

「あら、何か言ってるようね？」

「今生への別れか怨嗟の言の葉かと」

「それは是非とも聞いてみたいわね」

「かしこまりました。轡を外せ」

巨漢の男の言葉に剣を振り上げたままの細身の男とは別の顔に入れ墨のある気合い入ったにーちゃんがおっさんの轡を外す。

「さあ、あなたの死に際の呪いの言葉を聞かせてちょうだい」

少女がやたら期待の籠った瞳でおっさんを見つめる。

どうやら少女は特殊なご趣味をお持ちのようだ。

これが俗に言う変態なのかもしれない。

「とりあえずおっさんを殺すのは待とうか？」

「嫌よ」

「なして？」

「だってわたくし人が死ぬ直前の絶望や怨嗟の声が好きなんですもの。殺さなければ聞けないでしょう？」

それが本音からくるものなら、この娘はかなり危ないよな？

おっさんってば知らず知らずのうちに虎穴に入ってたわけか……オ
ーマイガット！

「……殺さないで下さい」

「ダメ！」

おっさんの切実な願いは可愛らしく断られた。

どうする？

どうすんの？

どうすりゃいいのっ！

おっさんめっちゃピンチじゃん！？

絶体絶命とかそんな雰囲気じゃん。

口八丁で丸め込むとかそんなこと出来るレベルじゃない気がする。あっちはおっさんを殺す気満々過ぎてどうしようもない。

よし、ここは法を盾にしよう。

「人殺しは犯罪ですよ？」

「あら、ここがどこかの町の往来で、わたくし達の他に誰か目撃者でもいれば別ですけどここは町ではありませんし、周囲にわたくし達以外の誰かおりますかしら？」

いませーん。

木に確認してもらったけどあんたらしか人はいませんでしたー。くそっ、なら一か八かで良心に訴えてみよう。

「おっさんには妊娠中の妻と三人の子供が腹を空かしておっさんの帰りを待ってるんだ」

「子供がお腹を空かせるなんてあなたの罪だわ。無計画で作るからダメなのよ。どうせ養いきれなくて口減らしに捨てると言う更なる罪を犯す前にわたくしが断罪して差し上げるわ」

なんか怒られた。

彼女は自分が言ってることが目茶苦茶だと気付いてるだろうか？

「……もういいわ。やっぱ死ぬ間際でないといい声では鳴いてくれないみたい。殺しなさい」

下される死刑執行の言葉。

振り上げられた剣がおっさんの首へと降ろされるのがスローモーションのように緩やかに見える。

終わった。

よくよく考えればすでにおっさんの生は大分前に終了している。

今は何の因果か意識はそのままに新たな生を与えられたに過ぎない。その与えられた生を返還する時が来ただけのこと。

これでおっさんに主人公補正というものが存在するならば、空から雷が落ちて剣を振り下ろす男に落ちるのだろうが、そんなことがおっさんに起こるわけがない。

あ、でもとりあえず「大樹、東西南北……わりい、おっさん死んだ」とか言って笑った方がいいんかな？

しかし、今更間に合わないよね？　どんだけ早口で言わなきゃならんのもって話だし。

ならば足掻くだけ無駄なのかもしれない。

ちよつと理不尽が過ぎすぎて納得出来ない部分もあるが、無理矢理でいいから納得しとこう。

理不尽が過ぎすぎ……ぶほっ。

キンツと甲高い音。

それはおっさんの首へと当たった剣から発せられた。

しかしその剣はすでに元の姿とは掛け離れ、刀身を半ばから失っていた。

辺りに静寂が満ちる。

誰もが起こった事象に啞然として言葉を紡ぐことが出来ない。

そんな中、おっさんの耳には聞き覚えのある声が聞こえてきた。

【ラルドは武器破壊のスキルを得た】

おっさん、捕まる（後書き）

主人公がポジティブ過ぎる……

作者がネガティブな反動かもしれないっすね

一里は約3・927キロメートル。ということで千里は約四千キロメートルです。間違いないですよ？

本来の千里眼は遠隔地の出来事や将来の事柄、隠された物事などを見通すことのできる能力とのことですが、主人公の千里眼は今のところ遠くがよく見えるだけです。

おっさん、逃げる

「た、助かった……のか？」

思わず口から声が発せられる。

それはこの場の静寂を切り裂いてその場の全員に正気を取り戻すには十分過ぎた。

「お、おれの剣が……」

細身の男はすぐ悲しそうな顔でその場に両膝をついた。

まあ、自分の剣が折れたのだ。大切にしてればただけその衝撃も大きいだろう。

それにしてもなぜ剣が折れたのか？

いや、そもそもなぜおっさんは死んでない？

「あなた……一体何をしましたの？」

少女がその鈴のような声を欺瞞色に染めて聞いてくるが、おっさんの方が聞きたいくらいだよ。

何をしたかの問いは簡単だ。答えは何もしていない。

とゆーか縛られてるんだから何も出来ないと言うのが正しい。

んじゃ、どうしておっさんは死んでないのか。

普通、剣で斬られれば人は死ぬ。

ん？ 剣で……斬る？

あ、斬撃無効だっ！

大樹にもらった斬撃無効のスキルがおっさんの命を繋いだのだ。

いやー、もらったはいいいけど使う場面ないし、実感したことなかったからすっかり忘れてた。

「わたくしの問いに答えなさい」

おっさんが思考に耽っていることで返答しないことにイライラしているのか、苛立ちの感じられる声音で少女がせっついてくる。

「おっさんが何したかは自分で考えてね」

ここでむやみやたらに正直に言うこともあるまい。
斬撃が効かないんだったら槍で突き刺しなさいってなる可能性が高いわけだし。

「くっ、なるほどね。剣が当たる間際に笑ったのは自分が死なないと確信していたのね」

はて？ 剣が当たる間際におっさんってば笑ったつけ？ そりゃ、笑った方がいいのかな位の思考はあったけど実際には……あ、そういえばくだらないことにウケてたかも。

とっさに浮かんだダジャレほど後々思い返して見るとくそ寒いことが多いんだよな。

そもその話、理不尽が過ぎすぎてなんてダジャレでもなんでもなく、ただ『すぎ』って言葉を一つ多く使っただけだ。

「アイリス様、わたしがザラに代わりこの者を処刑しましょう」

あ、まだ諦めてなかった。
当然か。

次に進み出たのは上半身マツチヨな男だった。

ただ……顔がチワワだ。

え、嘘？

何これ可愛い。顔ちっちゃい。

「いいわ。クピン、やりなさい」

「御意」

名前も可愛い。

マツチヨなのが残念かと思いきや、それがギャップになって更に可愛い。

って、和んでる場合じゃねーっ！

ヤベーよ。早く逃げねーと殺される。

でもどうやって？

「ふんっ！」

とりあえずおっさんを束縛する縄に力を込めてみる。

【剛力のスキルが発動した】

天の声が聞こえる。意識発動型のスキルは発動と同時に天の声のお知らせがある。おっさんが現状持つてる意識発動型のスキルは千里

インセクトフオーゼ

眼、魔力波、昆虫形態、そして剛力の四つだ。

スキルを発動させるとブチブチッという音になってあっさりと拘束が解けてしまう。

そういえば、抵抗らしい抵抗したことなかったけどこうもあっさりといくものなのか。

最初からやっつけば良かった……いや、使っていないから忘れてただけなんだけどね。

「逃げちゃダメ。＜赤熱の鎖よ 拘束せよ＞」

おっさんの拘束が解けたのを見た少女が腕を振るって言葉を紡ぐ。するとどこからともなく現れた赤い鎖がおっさんを拘束する。

「あっつ！」

ジューという肉が焼ける音が耳に届く。

この鎖、熱いなんてもんじゃない。

「ウフフツ、その苦悶の顔堪らないわ」

少女はおっさんの顔をみてその表情を喜悦に歪ませる。

「さあ殺しなさい」

「覚悟は良いか？」

「熱いとゆーか痛くなってきた」

チワワが背中に背負っていた大きな剣を構える。

何キロあるのかわからないほどに重量感タツプリの無骨なデザイン。数多の獲物を斬ってきたのか、その刃はところどころ刃零れしている。

しかしそんなことに今のおっさんが注目出来るはずはない。

熱くて痛くて悶えることしか出来ないのだ。ぶっちゃけ、チワワが何もせずともこれだけでいずれ死ぬ。

くそー、これが蠟燭から垂れた溶けた蠟ならばご褒美なのに……
イメージだ、イメージしろ。このあっつい鎖は女王様の賜ったものでしかないんだ、と。あ、大分マシになってきた。

「さらば」

大剣が振り下ろされる。

「へぶっ」

その一撃は斬撃無効のスキルによりおっさんを切り裂くことは出来なかった。だが、その重量とチワワの腕力でおっさんの体が地面にめり込んだ。痛い。確かにこれも痛いのだが……

「鎖の方が痛い……」

素直な感想がこれだ。

もう、マジで拷問だよこれ。まあ、イメージの影響でちょっと興奮するけど。

「まだ生きているだど？」

チワワが驚愕している。

驚いた顔がまた可愛いなオイ。

そういえばさっきまた新しいスキルを手に入れたんだよな。

武器破壊ってことで多少の当たりは付けられるけど具体的な条件とかはわからん。しかし、幸いにも大剣はまだおっさんに接触してるわけだし試してみる価値はある。

「壊れろ」

【武器破壊のスキルが発動した】

天の声とともにチワワの剣に輝が入り、そのまま砕け散った。

「なっ！」

少女、周りの男達から声が挙がる。

おっさんとしては鎖も壊れて欲しかったが残念ながらそうはうまくことが運ばなかったのは悔しい。

「……なるほど。武器破壊のスキルですか……他者の武器を幾千幾万も破壊したものが至ると言われている境地。有象無象かと思いましたが、存外あなたは武人でしたのね」

「違います」

勘違いもはなはだしいことこの上ない。

おっさんが壊した武器なんて細身の男のものが初めてだ。

だったら何故おっさんがスキルを得たのかという疑問に突き当たることが、得たものは得たのだから仕方がない。細かいことは考えないようにしよう。

「謙遜は煩わしいからいいですわ。あなたに武器破壊のスキルがあると知れば恐れるに値しませんわ。ドラゴンを殺す前に武器を壊されては敵いせんから、わたくしの魔法で殺して差し上げますわ」

「ドラゴン、だと？」

いるのか？

いや、ここがファンタジーな世界だというのならいても不思議ではない。

「あら、知らなかったんですの？ いいえ、違いますわね。あなたも狙っていてしらばっくれてるのですわね？」

「どういう、ことだ？」

「演技がお上手ですわね。まあ、あなたの狙いがドラゴン討伐による勇名か魔法具の媒介としての最高級品であるドラゴンの素材なのかはわかりませんが、それでも目的が同じならばあなたはわたくしの敵。是が非でも殺しますわ。ライバルは少ないほうがいいですものね」

「いやいやいや、おっさんドラゴンに興味ねーから」

「さあ、遺言は済みまして？」

聞いちゃいねえよ……

くそっ、やべーな。逃げなきゃいかんが、剛力のスキルを使用しても鎖が引きちぎれない。それならば昆虫形態を……

昆虫形態！
インセクトフオーゼ

【失敗。対象に接触する不純物あり。昆虫形態時分のスペースを確保しろ】
インセクトフオーゼ

えー……うそーん……

そんな条件があつたんだ。

「何をわけの分からないことを……死になさい。＜古の炎よ 全てを滅ぼせ＞」

少女の言葉とともにその背後に炎が現れる。

それは雪のように白く、圧倒的な熱量を誇る炎の塊。

しかし、間近にいる少女は汗ひとつ掻いていない。周囲にいた男達は最も傍にいた巨漢の男以外は熱いのか少女から距離をおいている。おっさんにとって幸いなのは白い炎が現れたその瞬間に体を拘束していた鎖が消えたことだ。これなら逃げられる！

インセクトフオーゼ
「昆虫形態」

インセクトフオーゼ
【昆虫形態のスキルが発動した】

おっさんの姿がエメラルドグリーンのクワガタへと変わる。
しかし己へと迫る白き炎はすぐ目の前まで迫っていた。

「うおりやあああ！」

火事場の馬鹿力とでも言うのかがむしろに羽ばたいて上昇した結果、辛うじて炎の一撃をかわす。
でもその炎の余波は凄まじく、おっさんの体のあちこちが焦げた。

「面妖なスキルを持ってますわね」

空のおっさんへと目を向けた少女が面白いものでも見たかのような微笑みを顔に携える。

「あんたは危ないもん持ってるね」

「危ないなんてとんでもないですわ。魔法ほど高尚な力なんてありませんわ。魔法とは……」

「そうですか。んじやおっさんは逃げます。あばよ、貧乳」

「こら、わたくしがせっかく魔法について講釈をしてあげようと言うのですから聞きなさい！ とゆーか今なんつった！？」

おお、すっげードスの効いた声。

こりゃ殺意割り増しだな。

殺されても敵わん。逃げられる時に逃げる。

そもそも人恋しいからと言って関わって良かった人種ではなかった。

「逃がしませんわ。＜真紅の魔弾よ 敵を穿て＞」
「ぬおっ」

向かってくる赤いスーパーボールみたいな奴を華麗にかわしていく。ふふふ、おっさんがクワガタ姿でどんだけ飛んでると思ってんだ。これくらい避けるのなんて楽勝だ。

「何をしてますの！ 弓でもなんでも使ってあいつを落としなさいっ！」

「は、はいっ」

むおっ、今度は弓矢かよ。

まあ、狙撃ライフルとかがなくてよかった。さすがにライフルの弾はアニメのキャラクターでもない限りはよけらんねーからな。

さーて、逃げることに集中しないとさすがにヤバイ。おっさんの全力、その身に受けやがれ！

なんとか追撃をかわしながら逃げていると次第にポツリポツリと雨が降り、次第に雨足を強くしてきた。

そのせいなのかどうかわからないが、少女の追撃は止み、おっさんも一安心ということで近くの森へと身を隠した。

しかしあれだ。天然のシャワーは有り難いんだが、降り注ぐ雨が強すぎて一メートル先も見えない。

どこか雨宿りが出来るところが必要だろう。

おっさんはそんな場所をわざわざ探す必要はない。

ここは森。つまりおっさんのホームグラウンドなのだからそこの

木にでも適当な場所を聞けば良いのだ。

教えてもらったのは森の奥地にある洞窟。

入口は人が一人ようやく入れるほどに狭く、中は先が見えないほどに暗い。

熊とかが住んでるわけではなさそうだが、蛇とかがいそう。

「ふいふ」

人型になって洞窟に入ったおっさんは入口付近に寄り掛かって座り、大きく息を吐いた。

なんとも言えない体験だった。

まあ、一度殺された身からすればすでに通った道だと開き直れるのだが、やはり問答無用で殺されるというのは慣れないものだ。

斬撃無効のお陰で斬られることはなかったが、少女の魔法で火傷を……あれ？　ない？　火傷の跡がないぞ？　火傷しなかったのか？

いやいやいやあれで火傷しないなんてことはありえねーよ。でも現に火傷はしてない。

「わけわかんねえ……」

この世界はおっさんの想像を斜めにした出来事がよく起こる。

だからと言って自分で考えても埒がない。まあ、難しく考えてもしようがないのかも。

誰か説明してくれる人が現れるまで保留にしよう。

今は火傷しなくて良かったことで一件落着。おっさんはハッピー、はい終わり。うん、これでいい。

それにしても腹減ってきたな……

おっさんが持っていた日保ちする食料なんかの荷物は少女らに捕まった場所に置いてきてしまった。

森にいけば食べられる物を採集出来るだろうがさすがに土砂降りの中をと言うのは億劫だ。

では選択肢としてあるのは、我慢するか洞窟の奥に行ってみるかしかないわけだが、軽率な真似は危険だということを実感したばかりのおっさんは雨が晴れることを信じて待つことを選択したのだった。

おっさん、逃げる（後書き）

アニメのキャラクターでもない限りとか同じ架空の存在である小説のキャラクターが言うことに我ながら違和感を覚えてます。

なーんか次の展開が読めるぞって思われるかもしれませんが、そいつは胸のうちに秘めといて下さい。

おっさん、洞窟の中で……

洞窟に入ってからどれくらいの時間が経ったのだろうか。

少なくとも丸一日近くは経とうとしているのかもしれない。

その間ずっと天候の回復を祈っていたのだが、その祈りは通じず空の機嫌は悪くなっていくばかりだ。

雨が強くなるだけでなく、風が吹きすさび、雷公様が絶え間無く降り注いでいる。もうこれは嵐と言っても過言ではない。とゆーか嵐そのものだ。

洞窟の入口付近にいては風に煽られた雨が侵入してくるので、おっさんは現在、洞窟内をちよつとばかり進んだところにいる。

腹の虫はすでに限界の域に到達しようとジワジワと近付いてきてるところだ。

たった一日でと思うかもしれないが、この体は存外燃費が悪いのだ。

車で例えるならば一リットルで五キロくらいだろうか。昨今の低燃費の風潮で一リットル三十キロ走る車も開発されているというのに嘆かわしいことだ。

まあ、おっさんが乗ってた車は一リットル十五キロ程度でそれを基準にしているから、大体人の三倍は食料を消費すると考えてくれ。

おっさんが村にいた頃に畑仕事をする事になったのも、お前はよく食うんだから自分で作れみたいな揶揄があったからこそだ。

とりあえず、おっさんは人より食うので食料を確保せねば餓死してしまう恐れがあることはわかって頂けたかと思う。

そして、外に出るのは天気都合上無理となれば残る選択肢は洞窟の奥に何かないか探すしかない。

どんな生物がいるか分からないから危険？ そんなものこの空腹の前では関係ない。

むしろどんな生物であろうとも不意について殺して食ってやるくら

いの意気込みを見せなければなるまい。

弱肉強食焼肉定食、所詮この世は食うか食われるか。道具がないから火をおこすことが出来ないのが残念だ。

暗い暗い洞窟を進んでいく。

その歩みは牛歩の如くゆつくりと、細心の注意を払いながら恐る恐るといった調子だ。

この洞窟は内部が入り組んでおり、先を見通すことが出来ないが、身を隠しながら進むにはうってつけだった。

どれほど進んだのだろう。

入口から計れば大した距離を進んでないかもしれないし、もしかしたら結構な距離を進んでいるのかもしれない。

そんな曖昧な感覚でしかなかったが、この光景を見ればそんなことは吹き飛んでしまった。

洞窟内を進んだ先にあったのはとてつもなく広い空間だった。

暗く狭かった洞窟の中を進んでたどり着いたというのにそこは仄かに明るく、野球場が丸々入る大きさで、天井は見上げるほどに広い。

「ん?」

天井を見上げていた視線を戻すとおっさんの入ってきた道とは反対側に明らかに人の手によるものと思われる扉があった。

「行ってみるか……」

扉の前に立ったおっさんは意を決して扉をノックしてみる。次いで

「ごめんください」

声をかけてみたが反応は返ってこない。

聞こえなかったのかと思ひ扉に手をかけて開けてから中に声をかけることにする。

そして開け放った扉の中に見たのは確かに人が暮らしていると思われる場所だった。

洞窟の中に作られた住居とでも言うのだろうか。

天井は約三〜四メートルの高さがあり、通路の幅はおっさんが昆虫形態トラオーゼのスキルを使ってクワガタになっても余るくらいはある。

「すみませーん」

声をかけたがやはり反応はない。

誰もいないのだろうか？ それとも居留守？

どっちにしろ人が来るまで扉の前で待機しているべきではないのか。しかし、そんな考えは懦弱だとばかりに腹の虫が催促する。

おっさん自身も限界が近い。それがおっさんから冷静な判断力を奪っていく。

そしてそのまま扉の内部へとおっさんの足は進んでいった。

扉内部の通路の横には部屋のように区切られたスペースがあり、中を覗いて見れば寝台であろうものが確かにあった。

その他にも調理場や書庫などの確かに人が住んでいる形跡がある。

「すみませーん。誰か居ませんかー？」

声をかけてみる。

これが住居ならば侵入したのはおっさんだ。

不法侵入など泥棒の所業だ。そんなことは分かっている。

なのでおっさんは迷い込んだ旅人という設定だ。設定というかその

もののだが、そういうスタンスをアピールしとかなないと住んでる人に会った瞬間に切り掛かって来られそうだ。

あの赤髪少女みたいに人の話を聞かないような人物だったら出会った瞬間にアウトだが、あれはわりと稀な例だろう。

「あのー、すいませーん」

しかし、おっさんがいくら声をかけようとも反応は返ってこない。うーん……とりあえず誰もいないと仮定して調理場を漁ろうか。いやいや、そんなしたらもう言い訳できない。とりあえず誰かいなくまなく探してみよう。

いくつかある部屋の中を探してみたが、人の姿を確認することは出来ない。

やはり誰もいないのだろうか。

最後に残ったのは通路の奥にある扉。

他の部屋には扉がないのにここだけには扉が存在する。

そのことに微妙に嫌な予感がしなくてもないが、ここだけ見ないということは出来ない。

生唾を飲み込み、扉に手をかけ開けてみる。

しかし、そこには誰もおらず十畳ほどの空間があった。

ただし、中がちょっとおかしい。

なんとゆーかファンシーな世界観なのだ。

壁一面がピンク色でぬいぐるみやらおもちゃやらがいっぱい。お、幼児が使う滑り台まである。

部屋の中央には普通の三倍はある大きさのベビーベッドらしきものがあり、その頭上にはクルクル回るおもちゃ、通称オルゴールメリーである。

完璧に赤ちゃんの部屋だ。

とゆーか品揃えが豊富過ぎてこの部屋の持ち主の親バカ度がよくわ

かる。

ただ、その部屋の持ち主である存在の姿はない。その代わりにベビ―ベッドにはダチョウの卵より大きな真っ白い卵が鎮座している。今のおっさんは猛烈な空腹に襲われている。そんな時に卵なんてご飯に合いそうなものを見つけたのだが、こんな部屋に君臨する卵を食材として見ることが出来るのだろうか？ いや、わかる。あれは食材として決して見てはいけないものだ。ただ好奇心がくすぐられてしまうのは仕方あるまい。一体あれは何の卵なのか。そして卵生の生物におもちゃなどをわざわざ用意するのはどんな人なのかと疑問が沸いてでてくる。

溢れる好奇心を抑え切れず卵へと近付く。
そしてそっと手を触れてみた。
手触りはツルツルで微かに温かい。

【無色の魔力溜まりを感知。吸収成功】
【ラルドは認識偽装のスキルを得た】
【ラルドは衝撃無効のスキルを得た】
【ラルドは時間遅延のスキルを得た】

え、何？ 何事？

いきなり天の声が聞こえたけど……
ってあれ？ この卵ってこんなでかくなかったよな？
なんか小学一年生のお子さんが丸々入ってそうなくらいに巨大化してんだけど……

あまりの出来事におっさんビククリというか呆氣にとられています。

しかし、そんな時間も長くは続かない。
なぜなら卵にひびが入ったからだ。

「え、嘘？ 生まれんの？ えーっ!？」

はい、パニック状態です。

体が自動的に動き、卵から一步、二歩と後ずさる。ついには壁へと背中がくっついた。

そうこうしているうちに卵は割れ、中から出てきたのは卵と同じく真っ白な体の翼のあるトカゲ。

違う。

どう見ても竜だ。

竜はおっさんの見ている前で翼を大きく広げ、辺りをキョロキョロと見回す。

そしてその蒼い瞳がおっさんへと向けられ、ぱっちり目と目が合ってしまった。

「■■■■」

竜が何事か叫ぶが、それはおっさんでは判別出来ない。聞いたままを表現すればギャウーだろうか。

竜が口を広げておっさんへと飛び掛かってくる。

生物の親というのは大体が子供のために餌を用意するものだ。実際おっさんも幼虫時代は親であろうクワガタに餌をもらっていた。

ならば竜がおっさんのことを親が用意した餌だと認識しても不思議ではない。

「お、おっさんを食べたら腹壊すよ！ 装甲とか邪魔でしょ!？」

理解していないだろうとは思いつつも必死で弁明を試みる。

無駄な弁明をする前に逃げろと思うかもしれないが足が竦んでしまっただけ動かない。

ファンタジーな世界とは割り切ってもその象徴たる竜の前では

おっさんの思考など関係なく、いざ目の前にしてみると体の方が反応してくれないのだ。

だが、竜はおっさんの予想に反して目の前で静止し、おっさんの顔をペロペロと舐め出した。

「ほえ？」

思わずマヌケな声が漏れる。

しかしそんなことは意にも返していないのか、竜のペロペロ攻撃は尚も続く。

うわぁ、顔が竜の唾液でベチョベチョだ。

「ストップストップ舐めるのやめなさい」

竜の頭に手を置いて行為を制止する。

ちゃんとおっさんの意図が伝わったのか竜はペロペロするのをやめてくれた。だが、今度は頭をおっさんの胸にグリグリと押し付けてくる。

その……なんだ、もしかしておっさんってばこの竜の親とか思われてたりすんの？

「おっさんはお前のお父さんじゃないよ？」

そうは告げても理解はしていないのだろう。

グリグリ攻撃が止むことはない。

なんとゆーか、こうも懷かれるとおっさんの父性を刺激されるな。

だがおっさんが親でないのは純然たる事実だ。

それに、本当の親御さんに申し訳ない。

だってベビー用品をこんだけ揃えるくらいにこの子が生まれるのを
楽しみにしてたんだろうから……

「リリーツ！」

その時だ。

扉を蹴破る勢いで一人の女性が部屋の中へと入ってきた。

その女性は一言で表すなら美人と言う以外に言葉が浮かばない。

髪の色は光沢を持った白で歳をとって増えて来る白髪とは似ても似つかない。髪の長さは肩くらいで水分を多分に含んでいるのかポタリポタリと髪の中から水滴が落ちている。

どこかのパーティーに出てたんですかと聞きたくなるような艶やかな青のドレスも同様に水に濡れてその肢体に張り付いており、メロン畑と言いたくなるような胸元やむっちりとした臀部をより艶やかに演出している。

「卵が割れてる……っ！」

女性は愕然とした表情を浮かべた次の瞬間にこちらに視線を移し、まずは竜の姿を見て頬を緩めたかと思いきや、ギロリとおっさんのことを睨む。

彼女が部屋の中に入って初めて真っすぐに顔を見たのだが、少し長めの睫毛や目鼻立ちが綺麗に整っているため、やはり美人である。そしておっさんが勝手に認定した左目の目元にある泣き黒子がやたら色っぽい。

ただおっさんを睨んでいるためなのか竜を見ていた時は穏やかで少し垂れ気味だった蒼い瞳は鋭角に吊り上がり、口は歯ぎしりが聞こえてきそうなほどに噛み締められている。

「リリーに何をしたあっ！」

女性が声を怒り一色に染め、おっさんに近付いてくる。
そして同時におっさんの顔に向かって彼女の握られた拳が迫ってくるのが見えた。

あ、これ問答無用で殴られるやつだわ。

おっさん、洞窟の中で……（後書き）

やっとここまで来たって感じですよ。

ただ、またおっさんが強化されてしまった……

全然戦ってないのにまた防御力アップ

タグかあらすじにその旨を入れるべきなのかどうか……

おっさん、話し合う

女性の拳はおっさんの顔の中心を正確に打ち抜いた。

「普通に痛いっ！」

「なっ!？」

激痛に顔をしかめるおっさんと驚愕の表情を浮かべる女性。
おっさんの味わった痛みは例えるまでもなく人に殴打された時のそれだ。

だというのにその衝撃自体は全くないためのけ反るということはなく、ただ単に痛みだけが顔を起点に全身に回る。

「効いてないですって……」

「いや、痛いって言ったじゃん」

「くっ、ならばっ！」

女性はおっさんのツツコミを無視して距離をとり、構える。

「限定、部分解除」

女性の呟きと共にその右腕が白い鱗と爪を持ち肥大化する。

女性の華奢な身体には似つかわしくないその腕は、今なおおっさんの胸に顔を擦りつける竜のものと酷似していた。

「見かけによらずたくましい腕をお持ちですね……」

あれはやばくね？

殺る気が伝わってくるんですけど……

「とりあえず落ち着いて話でも……」

「黙れっ！」

そうは言っても……

とゆーか、なんでこうも立て続けに人の話を聞かない女と出会うの
だろうか。

おお、ゴッドよ……おっさんはあんたになんかしましたっけ？

「リリーに施された護りを解くだけに留まらず、拐かそうなんて万
死の刑に処してもまだ足りないわ」

要するに凄く怒ってますと彼女は言いたいらしい。

事の成り行きを弁明したいのだが、どうせ聞いてくれないんだろう
な……

だったら！

「武装を解除しろ。こいつがどうなってもいいのか？」

胸に擦りつけられる竜の頭を抱え込みながら女性を脅迫する。

第三者の目から見ればおっさんは悪だ。

だが、こうでもないと言聞いてくれそうにないんだもん。

「……下種め」

女性の腕が元の白魚のような腕へと戻っていく。

ああ、心が痛い。

だけど睨みつけるその瞳はご褒美と言えなくもない。

「おっさんの話を聞いて貰おう。あと、いくつか質問がある。拒否

権はない。拒否すればこの竜がどうなるかわかってるだろうな……
あ、こら顔を舐めるんじゃない」

ペロペロ攻撃リターンズ。

おっさんの顔は飴じゃないんだから、甘くないよ。むしろ塩っ気があるはずだからね。

「……リリーに手出しはしないで」

「君がわっぷ……素直にぬおっ……おっさんのおほっ……要求をのほほ……受け入れてくれるのならにあっ……だからやめなさいってば」

「クウーン……」

「そんな叱られたワンコロみたいな声で鳴いてもダメだよ。おっさんらは今から大人の話し合いって奴をするんだからね」

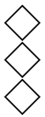
竜に言い聞かせるかのように言う顔と顔を舐めるのは止めてくれたのだが、おっさんの胸板という名の装甲に顔を擦りつけるようにして甘えてくる。

まあ、顔を舐めないだけマシか。

さて、これからこの女性への質問タイムだ。
しかしその前に……

「まず、食べ物を恵んでくれませんか？」

腹を満たすことを優先しよう。



与えられた食料は黒いパンと干し肉だった。欲を言えばスープ的な汁物が欲しいのだが、用意してくれと言って素直に従ってくれるかは不安だ。

そりゃあこっちには人質ならぬ竜質がいるのだから表向きは素直に聞いてくれるかもしれないが、これ以上好感度を落とす行為はいただけない。

今もおっさんがパンを咀嚼する行為の一挙手一投足を注視し、下手なことをしたら暴力に訴えて立場を逆転されかねない。

「さて、話し合いをはじめようか」

「……望みはなに？」

「だから話し合いだってば」

「リリーの心臓？ それとも鱗や爪、牙かしら？」

「いや、聞いてよ……」

「でもおあいにくさまだけど、リリーはまだ生まれて間もない幼竜に過ぎないわ。あなたの欲するドラゴンの魔力素材としてはまだ大した力を持っていない。だからリリーを今すぐ解放して。代わりに私があなたへ心臓を提供するから」

おっさんの話を聞いてないのか、それともあえてそうしているのか女性は一気にまくし立てる。

「だからまずはおっさんの話を聞きなさいっ！」

故に怒鳴り付けるように声を発した。

まずは何事も話し合いが肝心だ。

相手を話し合いのテーブルに着かせることは先の少女の時は失敗したが、今度こそはと意気込みをかける。

「わかった……」

おっさんの熱意が通じたのか女性が話を聞く態勢をとってくれたのは僥倖だ。

「まずは円滑な話し合いのためにお互いの自己紹介と行こう。まずはおっさんからね。名前はラルド。ダンディかつストイックな男で未婚です。あえてもう一度言うとう未婚です。好みのタイプは君のような果物屋さんを開けるボディの女性です」

「ラルド……ふっ」

なんか名前を鼻で笑われてしまった。

とゆうかおっさんの好みのタイプはスルーですか？

まあ、今思うと好感度がダウンするようなことを言ってしまったのでスルーしてくれるのは有り難い。

「次はそっちなね」

「クラベジーナ」

女性の答えは簡素な単語ひとつだ。

恐らくではあるが、

「それが君の名前かな？」

おっさんの言葉にクラベジーナさんはコクリと一回だけ頷いた。なんとも素っ気ないことだ。

「んじゃまずはおっさんの釈明を聞いてくれ……」

そうしておっさんはどうしてここまで来たのかと、なぜか竜が卵から生まれておっさんに懐いたという状況を一からバカみたいに正直に説明した。

この場において嘘を混ぜるのは大した益を生まないし、ばれた時に厄介だからな。

「……それを信じろと？」

「出来れば信じて欲しいかな」

「たまたまここへ入り込み、偶然リリーの卵に触れたら、なぜかリリーが生まれて懐かれた。ドラゴンの魔力素材には全く興味がない。そんなご都合主義のような豚の言葉を信じろと言うのか」

「そうだよ……っていうか今、おっさんのこと豚って言った？」

「お前はラルドという名前なのだろう？　ならば豚だろ」

全く脈絡がない。

でも豚と呼ばれても悪い気はしないな。

「まあ、いい。リリーを解放して即刻ここから出ていけ。ここを口外しないと言うのなら殺しはしないでやる」

それに正直が過ぎて立場が逆転しちゃった。

おっさんと竜の様子を見れば、竜質としてどうこうしようと思っていないことが丸わかりなのも原因の一端を担っているかもしれない。

「よし、リリー」

「リリーが汚れるから名前で呼ぶな」

「……君はクラブジーナさんの元に行きなさい」

「……行く気配がないな。」

どないしょ？　とばかりにクラブジーナさんへと視線を移す。

「リリー？ そんな豚なんか構ってないでこっちにおいで？」

しかし、リリーはクラベジーナさんの言葉を無視しておっさんに纏わり付く。

「リ、リリー？」

クラベジーナさんの顔に困惑と焦燥が浮かぶ。

ハッキリ言えばリリーの中ではおっさん＞クラベジーナさんの構図が作り上げられていると言ってよいのかもしれない。

「豚、どういうこと？」

「……おっさんが聞きたいよ」

「あんたリリーに何かしたわけ？」

「神に誓ってないはず……だよな？」

おっさんがしたことと言えば卵に触って、リリーが生まれて、リリーがおっさんを見たかと思ったら懷かれた。ただそれだけ。

しかしそのプロセスの中に何かしらでかしてないとは言え切れない。

「ちなみに竜って生まれて初めて見た存在を親だと思う生物？」

「断じて違うわ。確かにドラゴンは初めて見た存在を親と思うけど、ドラゴンは同種の魔力を感じ取ってるからドラゴン以外の種を親とは認識しないわ。だからたかが人間のあんたを親と誤認するのは有り得ない話だわ。ほんつつつつとおおおに何もしてないのね？」

念を押されて聞かれてもなー。

頭を働かせる。

そもそもおっさんはカテゴリーで見ると人ではあるがただの人って
のには当てはまらないかもしれない。

なにせ虫人だ。ムシビトそのせいなのか。

いや、竜は同種の存在を感じ取っているのならば、おっさんはアウ
トだ。だって竜じゃないもん。

じゃあ、何が原因だ？

考え込んでいると天啓のようにピロリンと考えが降って湧いてき
た。

確か、おっさんが卵に触れた時に無色の魔力吸収のスキルが発動し
たはずだ。

これによって吸収したのが竜の魔力ならば、それを感じ取ったりリ
ーがおっさんを同種として認識してしまった可能性がある。

だが、正直にこれを告げたらおっさんの命がまずいことになるの
か？

結局お前のせいだとか言われて殴られるオチが見える。

隠すべきだ。そう、これはおっさんの秘め事にするべき事項である。

「な、なんにも知らないよ？」

「なにか心当たりがあるのね？」

な、なぜわかった。

クラベジーナさんは読心術でも心得ているのか……

「ない。何もない。おっさんまるで何もわからないです」

「言え」

「何も知らないってば！」

「だったらなぜ挙動不審になるのかしら？」

「おっさんは元から挙動不審だよ」

「……はあっ、まあ、リリーがあんたを父親として認識している以

上どうこう出来ないわね」

どうやらクラベジーナさんは追求を諦めてくれたみたいだ。

「すでにあんたを父親として認識してしまっている以上、あんたを殺せばリリーが悲しむ。だから今はあんたを殺さないわ」

「この子と君はどうゆう……」

「あんたには関係ない」

おっさんの質問は途中でばっさりと切られてしまった。

「とりあえずリリーの親権をあんたから私に移すわ」

「出来るの？」

「出来るのって言うかするの。あんたは父親ではないということはこの子に認識させて私が母親だと認識させる。これしか問題解決の手はないわ。少なくとも言葉を覚える前に本能に刷り込まないと……」

クラベジーナさんの呟いた言葉の最後の方は小ささ過ぎて聞き取ることが出来なかった。

それにしても……

「親権がどうのこうのって、おっさん達、なんか夫婦みたいだね。クラベジーナさんのことジーナって呼んでいいかな？」

まあ、親権を争っているのなら崩壊間際ではあるけどね。でも、これを期にクラベジーナさん、いや、ジーナと仲良くなれたらいいと思う。

「嫌」

しかし、回答はただ一言だった。
手厳しい。

だが、脳内ではジーナと呼ばせてもらいます。

「あー……そうだ。もしかしたらなんだけど、クラベジーナさんって竜？」

「……ええ」

「だよ。腕とか竜っぽいのに変わったし、リリーの代わりに心臓をどうのこうの言ってたからそうかもってちよっと思ってたんだ」

腕が変わるの見なかったら、そういう考えなど微塵も起きなかったに違いないが、さすがにあれを見てしまうとそういう考えも起きるとゆーか

「この子の母親ってクラベジーナさんなんだ」

人妻で子持ち。

旦那を知らないだけに何か滾るものがありますなあ。

「……あんたには関係ない」

しかし、そこでジーナは言葉を濁してしまった。

もしかして、リリーの本当の母親ではないのだろうか？

それにしても、ジーナと仲良くなるというのは前途多難なようである。

おっさん、話し合う（後書き）

リリースもクラブシーナも最近買った『幻想世界11カ国語
ネーミング事典』を参考にさせていただいております。
便利です（＾―＾）

おっさん、下半身が……

「で、親権を移すってどうやんの？」

裁判所で協議するみたいなことは出来ない以上、具体的な案が必要だ。

「さあ？ 私もこんなこと初めてだし……とりあえずリリーの目の前から消えて。期間は一生」

「ふむ、それが一番確実なのかもね。ただ……外はまだ嵐だね？」
「ええ」

笑顔で肯定された。

「とりあえず嵐が止むまではリリー

「呼ぶなっば」

この子の視界に入らないところで過ごさせてくんない？ おっさん
も用事があるから嵐さえ収まれば出ていくから」

「……いいわ」

おお、却下されて今すぐ出ていけとか言われるかと思ったけど話が
わかるね。

「んじゃ、おっさんはテキトーにくつろいでるからあとヨロシク」

そう言って懐くリリーを引っぺがして部屋を出ていこうとする。

「ちょ、リリー。付いて行っちゃダメよ!？」

後ろの方でジーナが慌てたような声を上げるので振り返って見れば、リリーがおっさんのあとをちょこちょこ付いてきていた。

「いいかい？ おっさんはこれにてドロンするから君はお母さんと一緒にここにいなさい」

「■■■■■」

うん、全然わかってないね。

だってすっげー嬉しそうに鳴いてるもん。

竜の表情とかよくわからないけど確実に笑顔だわ。

「こうなったら実力行使だ」

身を翻して部屋の外に出て即座に扉を閉める。

いやー、おっさんの人生で五本の指に入るスピードだったよ。

「■■■■■」

おっさんが扉の外で達成感に包まれていると部屋の中からリリーのものらしき慟哭の叫びが聞こえてくる。

ああ、出会ってまだ一時間未満だというのにそこまでおっさんのことを……

なんて感慨に耽る余裕などなかった。

ドンッという音と共に局所的な地震が起きる。

音の発生源は今しがた閉めた扉からだ。

中の様子を伺うことなど出来ないが、ジーナの「リリー、止めなさいっ！」って声が聞こえたことから何が起きているのかは推し測る

ことが出来る。

おっさんが扉から数歩離れるのと扉に亀裂が入るのはほとんど同時だった。

亀裂が入ってしまうとあとは容易に扉は粉碎されてしまい、中から白き幼竜であるリリーが現れた。

「■■■■」

リリーはおっさんの姿をその視界に入れると喜びの声を上げて近寄ってきた。

「ダメって言ったじゃん……」

ここまでやるのか。

いや、竜に人の常識など説いても詮無いことなのかもしれん。

それにしても、よく扉もあれだけ持ったものだ。五発くらいは耐えたんじゃないか？

すっげー頑丈。

「ちょっと、なんですぐに遠くへ行かなかったのよ」

リリーのあとに続いてジーナが部屋から出てくる。

顔に不満と書いてありそうな表情だ。

「まさか扉を破壊するなんて思わなかったんだよ……とゆーか力づくで止められなかったの？」

「バカ。そんなことしたらリリーが怪我するかもしれないじゃない」

言葉が出ません。

こいつはアレだ。典型的な子供を叱れない親バカって奴かもしれない

い。だてに子供用のおもちゃを買い揃えてないな。

「じゃあ、今度こそうまくやるから協力ヨロシク」

「……ダメよ」

「は？」

「リリーがあんな声で泣くんだもの……可哀相過ぎる」

「もしもし？ それじゃ目的は達成されないのでは？ ここは心を鬼にするべきだよ」

「鬼になるならあんたがなりなさい。私には無理」

諦めるのはえーなー……

まあ、おっさんが原因であるわけだし、おっさんに出来ることならなんでも協力しなければなるまい。

おっさんの挑戦が今、始まる。

で、程なくして終わった。

結果は惨敗。

リリーったら何してもおっさんの居場所嗅ぎ付けやがんの。

何度か見えないところに移動できたのに即効見つかって、はいペロペロです。

「もう一回」

ジーナが無感情に告げる。

序盤までは協力してくれたのに最早ただの傍観者に近い存在と化していた。

「うーん、でももう外に出るしか方法がないんだけど……」

外はいまだに嵐。

台風のリポーターじゃないんだから、そんな中に突撃するのは御免だ。

「外はダメよ。万が一にでもリリーがあんたに付いていったら最悪の結果が待ってる」

「ならクラベジーナさんが全力で押し止めればいい話だと思うんだけどな」

「リリーには怪我一つなく育って欲しいの。そう誓ったから……」

誰にとは聞くべきではないのだろう。物凄く気になりますけどね。それにしてもリリーのことはどうするべきか。

ジーナが実力行使を忌避している以上、打つ手がないと言える。

それにジーナの言葉から察するにおっさんが実力行使でどうこうするのとは止められそうだ。暴力でもって。

まあ、そもそも何の罪もないリリーに対して実力を持って排除する考えなど端から除外の対象だ。実力自体がないとも言えるがね。ならばいいっそ

「もうおっさんが父親でいいんじゃないか？」

出来ないと言うのなら受け入れてしまった方が良い。

しかも、おっさんが父親ってことはジーナは母親だ。

つまりリリーを通しておっさんとジーナの間に内縁が生じる。

あれ？ 悪くないどころかこれって名案だろ。

おっさん目茶苦茶冴えます。

「嫌よ」

「即答ですね」

やっぱ旦那とかいて、その辺りを気にしてるのかな？
気配のカケラすらもないのに忌ま忌ましい奴だ。

「リリーの父親が豚とか有り得ないわ」

「……それだけ？」

「十分な理由でしょ」

「いや、ジーナの旦那の立場がなくなるからとか……」

「は？　なんで私に旦那がいる設定なのよ。とゆーかジーナって呼ぶな」

旦那はいない、だと！？

未婚の母って奴か！

た、堪らん……

「鼻息荒い、気持ち悪い」

「おっとスマン。つついジーナの属性に興奮してしまった」

「だからジーナって呼ぶなってば！」

「H A H A H A、ソーリーソーリーヒゲスオーリィー」

「殺す」

あ、痛い。

マウントポジション取られた。

ジーナってば無心に殴ってるよ。

しかしなんだな……このアングルは絶景だ。

したから見上げる二つの丘のなんと見事なことよ。

熱情を持て余すとはこのことか……

「ひうつ」

突然ジーナが可愛らしい悲鳴を上げ、瞬きほどの時間でその場から跳び退く。

一体どうしたと言うのだろうか……

理由はすぐにわかったが深くは語るまい。ただ、カブトムシがヘラクレスとまではいかないがアトラスくらいにはなっていたとだけは告げておく。

ジーナはその変化でも感じ取ったのだろう。

「な、なんで……バカ、変態っ！」

「男ならば当然の反応だっつーの。まあ、おっさんも恥ずかしいけどね」

顔を真っ赤にするジーナ。

しかしおっさんは断固として不可抗力の看板を掲げたい。

未だに禪一丁ふんどしなのはおっさんに合うズボンがないからに他ならない。でも恥ずかしいことは恥ずかしい。溜まってるんだろうな……

「とりあえず何か腰に羽織るもんくれ」

この台詞、虫人ムシビトになってから二回目である。

これを言った瞬間におっさんに哀愁さが滲み出てやしないだろうか？

「ほらっ」

顔に叩きつけるようにジーナがおっさんに衣類を渡す。

それを手にとっておっさんは驚愕するしかなかった。
なぜならば……

「ス、スカートだと……」

渡されたのは青いスカート。
それもミニだ。

下半身に当てて確認してみたが太ももの真ん中辺りまでしかない。

「いやー、ジーナは冗談きつついなー。おっさんの性別は男だよ」

「冗談もなにもあんたに渡せるのはそれしかないわよ」

「いやいや、タオルとかでいいんだよ？」

「取れたら嫌じゃない」

確かにそうかもしれないけどさ。

「じゃ、じゃあせめてロングなスカートを……」

もはやスカートを着用する覚悟は決めた。

ズボンとかがあればまだいいのだろうが、村の男連中のものでもダメだったのだからジーナのサイズではパツンパツンどころか入りもしないだろう。

だったらもう妥協するしかないじゃない。

「気に入ってるからダメ」

「そーゆー問題？」

「お気に入りの服をあんたが着ていると想像しただけで寒気が走るわ」

「うう……これしかないのか……」

渋々ながら着用してみるのだが……

「ウエストがきつい」

「当然ね」

全然閉まりません。

「そこでこれよ」

そう言ってジーナが取り出したのは安全ピンみたいな形のもの。つーかもう安全ピンだ。

それを数珠繋ぎにしたものの端っこを閉まらないスカートへと刺して留めた。

「これでよし」

よくはない。

だって男の尊厳とか諸々が崩れてくもん。

でも待て。世の中にはメンズスカートという分野のオサレアイテムも存在する。

これもそれだ。

例えばメンズスカートは一般的にズボンの上から着用するものであってもそれは一般的な話であって、一般的じゃないならばズボンを履かなくてもオツケーなんだ。

改めて自分の下半身を見てみる。

スカートから禪が見えるのはご愛嬌としてオシャレとして見ると悪くないかもしれないかもしれない。

「気に入った」

笑顔でジーナに伝える。

しかし、その発言を聞いたジーナの顔は確実にドン引きだった。

「気持ち悪い」

彼女の言葉がおっさんの心を貫く。

現実とは斯くも厳しいものであった……

おっさん、下半身が……（後書き）

R15ならこれくらいの表現は許されますよね？
これでも二度ほど書き直したんですよ……

おっさん、相互理解を深める

ジーナは反対しているが、おっさん自体はリリーの父親になると決意を固めた。

確かに母親であるジーナの意思は重要だが、もっと重要なのは子供であるリリーの意味だ。

そのリリーがおっさんに懐いている以上、父親と名乗るのは絶対にダメと言えるわけはなかった。

洩々、本当に洩々ながらもおっさんが父親と自称することを認めてくれたジーナとリリーと共におっさんは暮らすことになった。

一つ屋根の下に赤の他人同士が住む。まあ、厳密には屋根の下ではないのだがそれは瑣末な問題である。

要はおっさんとジーナは同棲状態というわけだ。

これはもはやアレがあれしてコレがこれする状況になっても大丈夫ってことに違いない。

大樹の用事？

ふん、そんなもんはおっさんが死ぬまでに果たせば問題ないのだ。

大樹と美女との同棲ならばどちらを選ぶかは火を見るより明らかである。

「ところで、ジーナって竜なんだよね？　でも見た目人間そのものなのは進化したから？」

腕が竜っぽくなるのはわかったが、ジーナは腕を竜っぽく出来る人間としか思えない。

おっさんも心臓云々のことをジーナが言わなければそうだと思っていたことだろう。

「だからジーナと呼ぶなって……いや、もうジーナでいいか……
私が人の姿をとるのは進化などではない。既に人より優れた存在であるドラゴンが人の姿をとる。それは進化ではなく退化ではないか？
人の姿になるのは擬態のようなものだ。私の父親が人間だったらしくてな。だから人間の姿をとっている」
「ふーん、それじゃ父親がエルフだったりドワーフだったりしたらそれになれるわけ？」
「そうだ」

なら、仮におっさんとジーナの間に子供が出来たら虫人^{ムシビト}になれるってわけか。

「リリーは何になれるの？ やっぱ人間？」

「リリーは……確かエルフだったか」

「つまりエルフとヤツて出来たんだ」

「もう少しオブラートに包んで話せないのか……。まあ、認めたくないがあのかくそエルフがリリーの父親には違いない。認めたくないがな」

どことなく他人事なんだよな。

それにしてもなんで憎々しげに肯定するんだろうか。

もしかしてリリーの本当の父親はかなりの遊び人とか？

とにかくリリーの本当の父親の話は避けた方がよからう。

「どれくらいでエルフの姿になれるのかな？ つーか今更だけどリリーって息子と娘どっち？ まあ、名前の響きからして娘っぽいんだけど、生まれる前から名付けてたみたいだしさ」

「ドラゴンは雌しか生まれない」

「じゃあ娘か」

元の世界の親父&お袋様。

いきなりですがあなた方の息子に娘が出来ました。

あなた達にとったら孫です。

体長はすでにおっさんより多少でかいですが、元気な『竜』です。

いや、冗談とかじゃなくマジ。

天国から見えるならば見守ってやって下さい。

もし、まだ生きてるならば身体に気をつけて年金が受給出来るまで長生きしてくれ。

「んで、どれくらいで擬態だっけ？ それが出来るようになるの？」

「大体、半年から一年くらいの間だ。言葉を話せるようになった辺りで親が教えてやるんだ」

「えっ、おっさんだと出来なくない？」

「私が教えるから問題ない」

そうだよね。

あれ？ じゃあおっさん、親としてなにをすればいいわけ？

父親初体験だから何していいのかわからん。しかも、娘は竜だ。人間とはまた勝手が違うだろう。

「なら、おっさんは生き様を見せるか」

「どうしてかわからないが、果てしなく不安だ」

失敬な。

おっさんの生き様が素晴らしいものならばそれを手本にすればいいし、ダメならば反面教師にすればいいだけの話だというのに……
いや、別におっさんの生き様がダメだって思ってるわけじゃないからね？

「とゆーか今度は私が言いたいことがあるのだが、その前にその変

な兜くらいは取れ」

そう言ってジーナはおっさんの顔を見つめる。

だが、おっさんは兜など被ってはいない。

まあ、兜を被っているように見えるのは否定しないがな。

そのことをジーナに言ってみたが当然信じてもらえず、なら取ってみろみたいな流れになって頭を引っ張るジーナと踏ん張るおっさんの構図が出来上がり、おっさんの首がもぎ取れるんじゃないかくらいの痛みに耐えた結果、おっさんと兜みたいな頭は着脱不可ということを感じてもらったことが出来た。

「まったく、お前はなんなんだ？」

「おっさんは虫人^{ムシビト}って言う、虫から進化した新たな人らしいよ」

「……で？」

「でって……」

「その話のオチ」

「いやマジだからオチとかないよ？」

「本当になのか？」

「イーエスッ！ 見ててくれ。昆虫^{インセクトフオーゼ}形態」

「【昆虫^{インセクトフオーゼ}形態のスキルが発動した】」

「

天の声と共におっさんの姿がクワガタへと変身する。物理的には有り得ないが、その大きさはリリー並にでかい。

ジーナがそれを確認したところで昆虫^{インセクトフオーゼ}形態を解いて人型に戻る。

どこをどうやったらそうなるのかわからないが、^{ふんどし}褌もスカートも昆虫^{インセクトフオーゼ}形態をすると消え去り、人型に戻ると履いた状態で戻れるという不思議現象が起こる。

そのことに細かいツツコミはしない。なぜならおっさんにとっては

都合がいいのでな。

「……頭痛い」

言葉通り頭を抱えるような仕草をするジーナ。

まあ、新種の人種って言われても普通は信じられるわけではないよな。今は脳が処理しようとして踏ん張っているのだろう。

でも、ジーナには知っておいてもらいたかった。

何より……

「竜って狙われてるんだろ？　なんでもかは推測でしかないけど理解はしてるつもりだ。要は珍しいからだ。なら、竜並に珍しいおっさんは同様に狙われる恐れがある。なら、運命共同体としておっさんはジーナ達に相応しいでしょ」

「……そうか。最悪、お前を差しだけばリリーは助かるかもな」

なんか怖いこと言われてる。

でもまあ、娘のために命を賭けろと言われたら従うのもやぶさかではない。

しかし命を賭けるほどリリーに愛着があるかと聞かれればまだ首を傾げてしまう段階かもしれない。

そこらへんは追い迫いの話だ。

「それはそれとしてさっきから竜竜と言っているが、私達はドラゴンだ。多少イラッとくるから直せ」

「わかった」

素直に頷く。

彼女なりのこだわりなのだろう。尊重できるところはするべきだ。

「ところで、お前いくつだ？」

「なぜにそんなことを？」

「いや、外見から判断はつかんし、自分のことをおっさんと言うからふと気になってな」

おっさんの年齢か……

うーんと、今の世界でクワガタになってからは一年くらいか？でも、元の世界では三十代も半ばを越えてるし……

あれ、でも人間として死んでからクワガタになるまで空白の時間とかあったけどそれも入れるべき？

なんかごっちゃになってわかんねー。

「永遠の十七歳です♪」

とりあえずそう答えてみた。

別にテキトーに言ったわけじゃないぞ？

物語とかって大体十七歳とか高校二年生が多いんだもん。

とゆーか十代後半が大半じゃん。

だからおっさんも主人公気分を味わいたかったとゆーか……

まあ、人間生とクワガタ生を足して二で割ったら大体そんなくらいだから少し鯖を読んで……あつ、ジーナがすげー胡散臭そうな目でおっさんを見る。

そりゃ、十代で自分のことおっさんとか言う奴はいないよ？

でもいいじゃん。

おっさんはいつまで経っても気持ちちは少年なのだから……

「とりあえず心はそんなくらいの気持ち」

「で、本当は？」

ああ、逃げられない。

ジーナの目は真実を追求する探偵のごとおっさんを捕らえて離さない。

もう、足した年齢を言っちゃうか？

否、押し通る！

「十七歳でっす♪」

「無理してる感が出るぞ。まあいい、それほど興味もないしな」

「ああん、酷い。でも……いい」

何がいいってその冷めた視線と態度だね。

相性バツチリじゃね？

実はおっさんもジーナの年が知りたいのだが、女性に年齢を聞くのは野暮ってもんだ。

これでジーナが二十五より下ならばそれだけで今のおっさんの気持ちに萎えてしまう。

だが、折を見て聞いてみよう。

とりあえず今は、

「リリー、よろしくな」

おっさん達の会話の間、ずっと甘えてきていたリリーの頭を撫でてやる。

するとリリーは嬉しそうに目を細めておっさんの行為を享受した。

うむ、可愛いな。

「ちっ、リリーに気安く触るなど言いたいがリリーが嬉しそうに受け入れているから、文句が言えない……」

「ジーナも撫でてやればいいじゃん」

「そうだな」

ジーナは立ち上がってリリーに歩み寄り、背中を撫でた。
リリーはその行為に対して気持ち良さそうな唸り声を発す。

「ああっ、リリーったら可愛いわ。すごくキュートよ。もう、可愛過ぎる。ハアハア……」

そんなリリーの反応がジーナの心の琴線に触れたのだろう。
めっちゃくちゃ興奮しながらリリーに頬擦りし出す。

そしてそれを受けたりリーはおっさんに頬擦りし始めた。
これはおっさんも何かに頬擦りした方がいいのか？

具体的にはジーナの胸とかに……

うん、撲殺される未来しか見えないから控えておこう。

とにかく、こうしておっさんとジーナとリリーの二人と一匹の生活はスタートしたのだった。

おっさん、相互理解を深める（後書き）

色々な補足回でした。

まだこの世界でのドラゴンの設定や主人公のパーソナルな設定はあるのですが、大体の感じを掴んでくだされば幸いです。

クラベジーナと料理（前書き）

閑話のようなものです。

クラブジーナと料理

ジーナ達と過ごすことに決めた日の翌日。

と言ってもここは洞窟の中なので朝と夜の区別はないので、眠ってから目が覚めた時のことだ。

おっさんはそこはかとなく漂う異臭によって強制的に脳を覚醒させるに至った。

「なんだこの臭い」

声を発してから再び漂う香りを鼻から吸い込む。

「うげっ」

感想を言えば、鼻の奥に不快な痛みと涙を誘う臭いだ。

例えるならばガソリンとくさを足して二倍した感じが近いだろうか。

おっさんガソリンの臭いって微妙に好きで、目の前にあればとりあえずチャレンジするんだけどこいつはノーサンキューだ。

鼻を摘みながら起き上がって隣を見てみれば、おっさんから離れようとしなかったために一緒に寝ることになったりリリーがぐったりしていた。

「リリー大丈夫か？」

「……」

明らかに元氣ねーな。

原因は言うまでもなくこの異臭だろう。

立ち上がって臭いの元を探すことにするが、おっさんがどこ行こうとも付いてこようとするリリーが微動だにしないことから相当参ってる様子が伺える。

おっさんを見つめるリリーの目には「逝ってらっしゃい」と語っているように見えた。

臭いの発生源は簡単に見つかった。

そこはこの住居における厨房で、ジーナが鍋で何かを煮込んでいた。

「あ、おはよう。よく眠れたかしら？」

「……多分」

この臭いがなければ快眠だっただろうがね。

「何やってんの？」

「何って、料理よ料理。リリーに精をつけてもらわなくちゃならないからね。はりきっちゃった」

料理ではなくて何かの実験じゃないのかと言いそうになるのをかろうじて押し止める。

まだ臭いが酷いというだけの判断材料しかない。これがまずいとは限らないのだ。

「ちなみに何をお作りになられてるのでしょうか？」

「シチューに決まってるでしょ。匂いで分かるじゃない。安心なさい。ついでにあんたの分も作ってあげてるから」

シチューってこんな臭いだったっけ……

つーか鍋の中が紫なんですけど。

いや、おっさんが知らないだけで紫のシチューがこの世界に存在しているのかもしれない。

おっさんの常識に当て嵌めるのは間違いの元だ。

「朝からシチューって重くない？」

「何言ってるの？ シチューは凄く栄養価が高いんだから精をつけるって意味でこれほど適した料理はないわ！」

それ自体は間違っではないかもしれない。

「あ、ありがたいね。ところで味見はした？」

ここで予防線を張る。

こうゆうののベタな展開として料理音痴は味見をしないというのがある。

ならば味見と称した毒味を本人にさせるのが一番だ。

「今する。……うん、美味しい」

ジーナは小さな皿にシチュー（仮）を味見して満足したように微笑む。

「ほら、あんたも」

差し出される小皿。

それは今までジーナが使用していたもので……

「いただきます」

おっさんはそれを躊躇なく口にした。

まあ、味の面ではジーナ自身のお墨付きもあるし大丈夫だろう。問題は食べた後に胃から立ち昇ってくるであろう異臭しかない。

だが、その判断は間違いだったと言わざるを得ない。

口にした瞬間、おっさんの背後に雷のエフェクトが発生したかのような衝撃が口の中に広がり、視界が白一色に染まる。

意識が戻って無理矢理シチュー（仮）を嚥下すると食道を通る時に通った道をシチュー（仮）が焼いていく。

無事に胃に達したとしても胃酸と互角の戦いをみせ、なおかつ異臭となって食道を逆流してくる。

はつきり言おう、クソまずい！！

おっさんの人生でもナンバーワンのまずさだ。

これなら砂場で作った泥団子の方がマシと言えるレベル。

一体何を入れればこの化学兵器を料理しながら作成できるのだろうか。

意識を失い、動きを止めそうになる頭を女王様に罵詈雑言を浴びせ掛けられる妄想をすることで必死に駆動させる。

それでもしなければ忽ち意識は闇の彼方へと消え去り、お花畑と川が見えるだろう。

くそっ、おっさんには毒は効かないはずだ。だったらこれだけの力を持つこいつは毒ですらないと言うのか……

「どうだ？」

ジーナが期待を込めた瞳でおっさんを見つめる。

「クソよりまずい」

正直は美德だ。

これを美味しいとかのたまったジーナの味覚は信用してはいけない。美味しいとでも言おうものなら、三食これになる。それだけは嫌だ。

「味覚大丈夫か？」

「え、ジーナの？」

「私じゃなくてお前のだ。こんなに美味しいのに」

ジーナは再び小皿に移したシチュー（仮）を口に運ぶ。

そしてやっぱり美味しいと言呟いた。

もはやシチュー（仮）ではなくヘドロと呼ぶに相応しい液体をなんでもないかのように摂取するとは……アンビリーバボーやで。

「さ、出来た。早速リリーに持って行ってあげなきゃ」

「そのヘドロを？」

「味音痴は黙ってる。とゆうかそれ以上私を不快にさせる発言をすればお前の○○○を×××××って□□□□に沈めてやる」

「すいません」

さすがに○○○を×××××されるのは勘弁だわ。

とゆうか味音痴言われたよ……

確かにおっさんの味覚なんて大きく分けると美味い・食えるけどまずい・食えないほどまずい・至って普通の四つくらいしかない。あとは辛いとか甘いみたいな味の感想を判断するくらいだ。これらは一般的な範囲からはあまり外れてないはず。

そんなおっさんの味覚はあのヘドロを絶対に食えないほどクソまずいと新たに五つ目の評価を作り出した。

なおかつ味の感想は『痛い』だ。

こいつをリリーに食わせるのはいかなものか。

しかしおっさんはリリーに食べさせる前に無理矢理ヘドロを全て平

らげるほどのガッツはない。

……すまない。リリーよ、犠牲になってくれたまえ。

「■■■■ー！！！」

ジーナが厨房から去った後、リリーのあげた悲痛な叫び声がえらく耳に残った。

「た、大変よ！ リリーが……リリーが！！！」

慌てた様子でジーナが厨房に舞い戻ってくる。

まあ、何が起こったかおっさんは察してるわけだが……

「どうした？」

一応聞かねばなるまい。

「それがいきなり意識を失っちゃったの」

予想通りではある。

「ハラナオールとドクケセルとキキメバイーズはあるか？」

「あ、あるわ」

「んじゃ、ハラナオールとドクケセルをすり潰して水を加えて混ぜ合わせ、一煮立ちさせたものにキキメバイーズを加えたものを飲ませればとりあえず大丈夫なはずだ。すぐに用意しよう。手伝ってくれ」

「う、うん」

急いで準備をする。

リリーはおっさんより丈夫そうだから死にはしないだろうが、早ければ早い方がいい。

ちなみにこのレシピは村に暮らしていた時にトイースの嫁から教わったものだ。なんでもこれであらかたの毒や病状は癒せるらしい。でもどちらかと言うと二日酔いでお世話になる薬だ。

「で、リリーはどうだったんだ？ 詳しく教えてくれ」

「シチューを口にしたらいきなり白目を向いて口から泡を吹いたの。病気かしら……」

「十中八九このシチューという名のヘドロが原因ですから」

「またそれ？ いい加減にしないと……」

「お仕置き？ ねえ、お仕置きすんの？」

「なんでちょっと嬉しそうなのよ……」

「とまあ、半分冗談だからいったん横に置いて、ジーナの作ったシチュー（仮）が色々な意味でまずい代物だったのは間違いないよ。毒が効かないおっさんをも殺しかねないほどにね。はつきり言えばジーナの味覚は変わってことだね」

「どこがどう変なのよ」

変だと言われて自覚のある奴もいれば自覚のない奴もいる。

ジーナは後者だ。

こういう奴には自身がいかに関わりとズレているのか思い知らせるほか自覚を促す処方箋はない。

しかし、現在ジーナの周りにいるのはおっさんとリリーののみ。そのうち未だ言葉を話せないリリーは数にいられていいものか迷うからとりあえず除外しておく。

すると、おっさんしかいないわけだが、おっさんの言葉をジーナが素直に受け入れてくれるかどうかは心許ない。

嫌がってる。

リリーがすげー嫌がってる。

とゆーかもう涙目だ。

どうやら薬を作っている間に目を覚ましていたらしく、そこに再び何かを食べさせようとするジーナに恐怖すら覚えている様子だ。

そしてその瞳がおっさんの姿を捉えるとお父さん助けてとばかりに縋るような視線を向けてくる。

「ほら、リリー」

ジーナは頑なに閉じられたリリーの口を無理矢理こじ開けようと上あごに手を当てて力を込めているが、リリーもリリーで必死に抵抗している。

なんかもう見てられないな。

「ジーナ貸しなさい」

ジーナの手から薬を奪い、リリーの目の前に立つ。

「大丈夫。これはジーナの作ったものじゃなく、おっさんが作ったから安全だよ（結構苦いけどね）」

おっさんの言葉にジーナが何か言いたそうな顔をするが、空気を読んだのか黙って様子を見ていくくれる。

「ね？」

■■■■

おっさんの言葉が通じたのか、それともおっさんが食べさせるから

なのか、何となく後者だと思うがリリーが素直に口を開いてくれたのでそこに薬を注ぎ込む。

「■■■■」

リリーは顔をしかめるようにしたが、それでもジーナの料理よりはマシだったのだろう。きちんと薬を飲み込んだ。

「うん、いい子だね」

リリーの頭を撫でてやるとリリーも嬉しそうに目を細めた。

「あんたばかりずるい！ 私も撫でるわ」

（ビクッ）

「リ、リリー……？」

ジーナがリリーの頭に触れようとした瞬間、リリーの体が妙な反応を起こし、震え出した。

客観的に見るとどっちも可哀相だな。

ジーナは良かれと思い愛情をたっぷり込めてあのヘドロを作り上げたのだろう。だが、その愛情によって怖い目にあったりリーの反応もまた当然だと言える。なにせ初めてといっていい食べ物があれば浮かばれない。

まあ、どっちが悪いかわれればジーナが十割悪いけどね。

だからおっさんは心を鬼にして言わねばなるまい。

「リリーはジーナの料理に恐怖を覚えたようだ。これ以上嫌われたくなければおっさんの監督の元で料理を作るか、二度と作るな」

「……わかったわよ」

さすがにリリーの反応で自分に非があることを理解したのだろう。
ジーナが神妙に頷く。

やはりおっさんの言葉よりもリリーの言動の方がよっぽど効くみたいだ。

こうして『ジーナ料理毒化事件第一章』は幕を閉じた。

なお、ジーナ作のシチュエーションはスタッフ（ジーナ）が半分ほどは美味しく頂きました。しかし、別のスタッフ（おっさん&リリー）が美味しく頂けなかったのと臭いに耐えられなかったことが原因でもう半分は捨てました。

大地よ、環境を汚染してすまん……

クラブジーナと料理（後書き）

次話は早ければ今日中、遅くとも明後日には投稿予定です。

おっさん、やることはやります

あれから六日ほどの日数が経った。

時間の感覚は相変わらず己の体内時計を目安に活動している。

時計というものは大都市でもない手に入らないらしく、村で生活していた時は太陽の位置で時間を計っていたのだが、ここは洞窟内であり、それすらも出来ない。

しかし洞窟内の生活もそう悪いものではないと思う。

暇ならゴロゴロしたりリリーと遊んでやったり、ジーナに今までのことを語ったりした。

基本的に喋るのはおっさんばかりだが、それでもおっさんの話を聞きながらジーナは頷いて相槌を打ったりしてくれるので聞き役としては及第点を挙げたい。

まあ、いざジーナの話を聞こうにも適当にはぐらかされてしまうのは残念無念といったところだ。

生活の必需品とも言える水に関しては洞窟内をちよつと行ったりこゝろに澄んだ水の湧き出る場所があり、困ることはなかった。

ちなみに料理に関してだが、ジーナがちよつとアレ過ぎるのでおっさんが作るようになった。

確かにおっさんは一人暮らししてたし自炊もしないことはないけど、基本コンビニのお弁当やら外食にお世話になってた人ですよ？

夜なんてビールと枝豆、焼き鳥だけで十分だ。

このトライアングルは高級フレンチのフルコースすら打倒すると思っ
つてます。

まあ、そんな考えの奴に繊細な料理を期待するのは間違いだ。

カレーのルウや味噌、醤油があればもう少し多彩な料理を作ってや

れるのだが、如何せん調味料が塩と胡椒しかない。なんか赤い香辛料もあるにはあるが調理初心者には手が出しづらいのが現状だ。

だったらもう作れるのなんて野菜炒めとかくらいじゃないじゃない。一回、小麦粉もあるし塩と水もあるからうどんでも打ったろかい！

と意気込んだが、結果はボロボロでグズグズの麺をぶっこんだ塩味スープの素うどんとなったので諦めた。

そしてまた野菜炒めへと料理は戻る。

そうしておっさんが作り上げた一品にジーナだけでなく、リリーも

「またかよ……」みたいな視線を投げかけるが無視だ。
だって……

ジーナの料理よりはマシだから！！

リリーもそれが分かってるのだろう。

視線は不満そうだが、出されたものは黙々と食べてくれる。
だがしかし、ジーナは違った。

「もう野菜を炒めて塩と胡椒を振っただけのインパクトのない食事には飽きたわ。明日は私が作る」

決意を秘めた瞳。

そして有無を言わさぬ迫力がそこにあった。

「リリー、明日は塩を舐めて過ごすことになるそうだ」

「■■■■■」

「そこっ、何で最初から食べようとしなない」

「だって……なあ？」

「■■■■■」

おっさんの問い掛けにリリーが何度も頷く。

この六日の間にリリーはこちらの話す言葉を理解するまでに成長した。

成長早すぎないかとも思うが、おっさんは一キラースタッグビートル《K S B》時代に十日強で幼虫から成虫になった経験があるので、それに比べたらまあ遅いよなってわりとすんなり受け入れちゃってます。

リリーの成長による利点としては意志疎通が図れることと、長い時間は未だに無理だが二、三時間くらいは傍から離れても大丈夫になった点だろう。

「大丈夫よ。あんた、私が料理する時は監視するんでしょ。だからあんたも食べられるものしか出来ようがないじゃない」

その設定をすっかり忘れてた。

だってジーナってば、あれ以来全然料理しないんだもん。しかし、おっさんが監督するならばジーナも変なものはいれらんないはずだ。とゆーか入れそうになったら全力で阻止すればいい。

「リリー、どうやら塩の結晶以外も口に出来そうだぞ」

「■■■■■」

「ああ、本当だとも！ おっさんに任せなさい」

「■■■■■」

「うん、お父さん頑張る」

「なんでリリーの言葉が通じるの……。これはあいつの方がリリーをわかっているってこと？ いいえ、違うわ。あれは単なるあてずっぽうに決まってる！ 豚、私の方がリリーを愛してるんだからねっ！」

「え、宣言がいきなり過ぎる。どっからそのセリフが導き出されたんだ？ はーん、さては生理でイライラふべしっ！？ ……痛い」
「デリカシーがない。あと、殴られたのならのけ反るくらいしろっ

！」

そうは言っても、衝撃無効だから痛みしか感じないんだよねー。それにしても顎とか頬じゃなく唇を狙って拳打を叩き込むのはどうなのよ。

まあ、殴られるのは嫌いじゃないけどさ。

「前向きに検討し、直していききたいと思います」

インパクトの瞬間におっさんの意志でのけ反ることが出来れば可能である。

こいつは高等技術だが、ジーナのサディスティックな心を満たすには習得せねばなるまい。

「べ、別にそこまで真剣な顔して考えなくてもいいんだぞ？」

なんでそこで一步引くんた。

もつとガンガン来いよ。

お前を殴っても面白みがないからどこかで別の獲物でも探そうかな
ゝ的なおっさんをくすぐる言葉が欲しいというのに！

「いや、おっさんはジーナからのごほう……ジーナの心の安寧のために努力するよ」

「ごほうってなんだ？」

ご褒美（拳）のことですとは言えない。

話を逸らさねば……

えーと……あ、そうだ。

「薪があと少しでなくなるんだけどどうすんの？」

料理をするには火が必要だ。

その火を起こす燃料は薪を使用している。

なんともアナログだが、洞窟内にガスが通ってたらそれはそれで怖い。つーか村でも薪が主燃料だった。

「あからさまに話題を変えたな。まあ、いい。薪がないなら取ってこい」

「どこにつて……外か」

「ちよっと待ってろ」

そう言ってジーナはどこかへと向かい、すぐに戻ってきた。そしてその手に握られていたのは一降りの斧。

「これで適当な木を切って持ってこい」

「なぬ？」

その言葉に耳を疑った。

「えっと……薪って落ちてる木を拾うんじゃないの？」

「それじゃいつまでかかるか分からないし、量も心許ないでしょ。ほら」

押し付けるように斧を渡される。

柄は木製で、刃の部分は鉄で出来ているそれはずっしりと重かった。

「さっさと行け。リリーはお母さんと一緒にいましうね。絵本読んであげるからね。今日は何がいいかな……」

「……無理だ」

「は？」

「おっさんには無理だ」

「たかが木を切るだけのことの何が無理なのよ？」

「おっさん、木と会話できるんだよ」

「ふーん、で？」

何その目。

町中の人混みの中でいきなり奇声を発した人を見つめる視線と同じじゃない。

くそっ、これまでの経緯を話す中で大樹や他の木達と会話したことを省いたのがいけなかったのか。

「だからきつとおっさんには木を切る時に木々の上げる断末魔の声が聞こえるはずなんだ！」

「それは多分幻聴だって」

「違うよ。そうゆうスキル持ってるんだよ！」

「そうだとして、あんたは明日も明後日も温かい食事を食べられることとどっちが大事なの？」

「いってきます」

仕方ないよね。

どことなくヒンヤリとした気温の洞窟内であったかいご飯は楽しみの一つなんだ。

例えば、毎日野菜炒めだとしてもそれが温もりを持っているだけでホッとする。

世のお父さん方があくせく働いて夜に帰宅した時に、ラップのかかったご飯をレンジでチンするのはそこに家族の温かさを求めるからなのだろう。

おっさんもまたその温かさが恋しい。

それが出来立てとなるならばなおのことだ。

利己主義と罵られようが一生恨むと言われようがやらなければいけ

ないことなのだ。

「とゆーわけで木を切りたいわけだが……」

『あな恐ろしや……』

「確かにア〇ルというのは魔性の穴だね。うん、恐ろしい」

『ワラワを伐採すると言うのか……』

「ツツコミなしか。確かにこの状況で言うべきじゃなかったけどね。それはそれとして、別に君でなくちゃダメってわけじゃないよ。なんか嫌われ者の木とかいないの？」

『そのような者など……』

『きるならワターシをキリなさーい』

『そ、そなたは……』

名乗り出たのは、手と手を合わせて輪を作れば収まるような幹の太さの細長い木だ。

『ワターシがいる。それだけでミナさーんにメイワークかけマース。』

『ワラワとそなたは良き友ではないか！』

『スミマーセン。でも……』

なんか切りにくくなる会話してるな。

『シャツチヨさんヤツチャてくださーい』

「おっさんはいいとこ係長止まりだったの。それにしても本当に切つていいんだな？」

『ハーイ、ワターシ背だけちょっとおつきすぎるせーでホツカのミ

ナさーんのせいちよのジャマーね』

「君の決意、しかと受け取った。いくぞっ」

実際問題、斧で木を切ったことなんておっさんの経験にはない。故に野球のバッティングをするように構え、幹目掛けておもつくそ振ってやった。

『ギャー』

ああ、予想通りの悲鳴。

ただ木を切るといふ行為が悪行のようにおっさんにのしかかる。

『鬼！』

『悪魔！』

『ひどいわ！』

『よせ！ 彼もまたつらいんだ』

『くそっ、僕達はただ見ていることしか出来ない……』

『見届けてやろうじゃないか。彼の覚悟とプレギエーラの最期をな』

なんか勝手に周りで話が纏まったらしい。

つーかプレギエーラって名前なのか……

どうやらこいつらは大樹の管轄から外れてるようだ。

何しろ名前がわりかし普通だからな。

辺りは静まり返り、聞こえるのはおっさんが振るう斧がプレギエーラとやらに当たる音と悲鳴のみだ。

いや、時々『ひっ』とか言ってるのは聞こえる。

正直なんだかつらいものがある。

「ふんっ」

『ヤラレタヨ』

プレギエーラの最期の言葉はあっけないものだった。

ごめんね。

おっさんはプレギエーラに向けて心の中でそう呟いた。

『どわっ、こっち倒れてくんなよ』

『ちよっと痛いんですけど』

『うぜー、マジうぜー』

ってあら？

『ああもう邪魔じゃ』

「え、もう少しなんかないの？　　つーかお前、プレギエーラを友達とか言ってたかった？」

『そうじゃ、プレギエーラはワラワの友じゃった』

「いや、その友が切り倒されたんですけど……」

『おう、そうじゃな。しかし、プレギエーラはすでにプレギエーラではなく、かつてプレギエーラであったただの木材じゃ。疾く持つていっとくれ』

「……はい」

頷きはしたが、納得は出来ない。

切ってる間はすっげー罵った癖に。

木が相手だからただただ心が痛かったのに……

つまり、木は所詮木。

おっさんとは感覚が違うものらしい。

イマイチ掴めん。

こうしておっさんは薪を手に入れ、洞窟の中へと戻っていった。

「アイリス様、奴がいました」

「そのようですわね」

穏やかに過ぎる時間もそう長くは続かない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0990y/>

オッサンの異世界記

2011年12月13日00時52分発行